UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

No. 70

特集・「アメリカGAP本部研修」紀行

GAPニューズレター　第70号

〈巻頭言〉信念の魔力… 1
創造主のハート… 2　ジョージ・アダムスキー
〈アメリカGAP本部研修の旅〉紀行
愛と太陽の大地　久保田八郎… 4
コンピューターによるUFO写真の
真偽判定は正しいか…… 26 田畑　宏
質疑応答（最終回）… 27　スティーブ・ホワイティング
〈写真〉東京上空のUFO… 29
会員の声…… 30
本年度総会予告・地方支部報紹介… 34
「アメリカ南米宇宙考古学の旅」参加申込者名発表… 35
日本GAP各地行事報告と予告… 36
日本GAP全国月例研究会案内… 40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共禁無断転載。

GAPとは

GAPは、「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について"知る"機会を与えられる人々であるという見地に立って1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは、「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に備えること」、人間はすべて"コスミック・パワー"の子であり、そのパワーの諸法則や宇宙に遍満している真実を確信をもって知ること、にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な知的存在からもたらされた"生命の科学"の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星から偉大な智慧をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、核爆弾にひんした地球に対して数千年の手をさしのべている。宇宙人をスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が政府内にいると思われるが、通常その真相は知らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は政治、宗教と関係のない非営利刊行物です。

■ 表紙写真は、1964年頃の故ジョージ・アダムスキーとフレッド・ステックリング夫妻。幼児は子息のグレン君（フレッド・ステックリング氏提供）。

信念の魔力

現代日本の聖者はだれかと問われれば神戸市の巽直道先生を筆頭にあげたい。先生は多年信念の力を応用することによってガンその他の難病を奇跡的に癒やしておられる、病人にとっては一種の救世主である。先生の方法は至極簡単で、般若心経を正しく解説して、心から恐怖を取り除き、マイナスの心（暗い悲観的な心）をプラスの心（光明に満ちた心）に変えることによって大きな変化が生じると説かれ、具体的には「治る、治る、必ず治る、きっと治る」という言葉を患者に数千回、数万回と繰り返させることによって、難病の奇跡的な治癒を生ぜしめておられるのである。現在も先生の指導により、信じがたいような奇跡が続出しているのであって、しかも病気治しばかりでなく、失跡人探し、その他各種の難事件の解決も可能であるという。

たしかに肉体細胞は人間の想念に反応を示す生き物であるから強烈な信念にもとづく反覆思念により肉体の患部に激烈な変化が生じることは充分に考えられることである。これは生命科学の一分野であって宗教的な秘法でも何でもない。般若心経は一宗教の教典ではなく、実は生命科学の根本原理を説いた真理の言葉である。これを宗教団体が意味不明のままオーム返しに唱える経文として長く商売道具にしてきたけれども何ら人類に裨益するものとはならなかった。

人間の信念には神秘的な魔力ともいうべきパワーが存在する。あの山にむかって、こっちへ来いと命ずれば、山がやって来る、というのは少々オーバーな表現であるにしても、すさまじい信念によって全く不可能と思われる物事が奇跡的に可能になることは、巽先生の指導を受けた多数の人々によって実証ずみである。

これは病気の治癒ばかりではなく人生のあらゆる面に応用できるのであって、そのためには望ましい物事を実現させる特殊な言葉を絶えず繰り返すのがよい。病気治癒を望む場合は前記のごとく「治る、治る、必ず治る、きっと治る」という言葉を唱え、自己の不幸な運命を良き運命に変えようとすれば「私の運命は良くなる、良くなる、必ず良くなる、きっと良くなる」という言葉を唱え続けるのである。ただし、単なるオーム返しではだめで、腹の底からわき起こる確信をもって、力強く、少しゆっくりめに、低い声で唱えるとよい。

これを編者はミラクル・ワード（奇跡を起こす言葉）と名付けて、みずから実行しているのである。しかもこのことはアダムスキーも「生命の科学」の中で教えているのだ。

してみると、実際に言葉を口に出して唱える反覆思念は一種の宇宙の法則の応用であるといえようが、これに対して更にイメージ法をつけ加えるともっと効果的である。つまり望ましい物事がすでに実現して自分が歓喜している光景を心中に明確に描くのである。難病で苦しんでいる人は「治る、治る、必ず治る、きっと治る」と唱え続けるとともに、自分がすでに快復して完全な健康体になり、元気一杯に働いているイメージを心中に描く。すると、必ずそのとおりになるのである。あるいは自分が望ましい職業に就こうとする場合は、「（自分の適職は）必ずみつかる、必ずみつかる、もうみつかった！」と唱えながら、自分がすでにその職について喜び勇んで働いている光景を心中に明瞭に描くのである。そうすると、思いがけぬ動機によって、その職業が本人の方へ接近し、出現してくるのである。

以上のミラクル・ワードやイメージ法を真剣に応用し、明るい気持で待っていれば、望ましい物事は確実に展開するのであって、しかも費用は不要であるから、この素晴らしい方法を用いぬという手はないのに、どういうわけか本会会員でこの理論を知っている人は多いにもかかわらず応用する人は稀である。

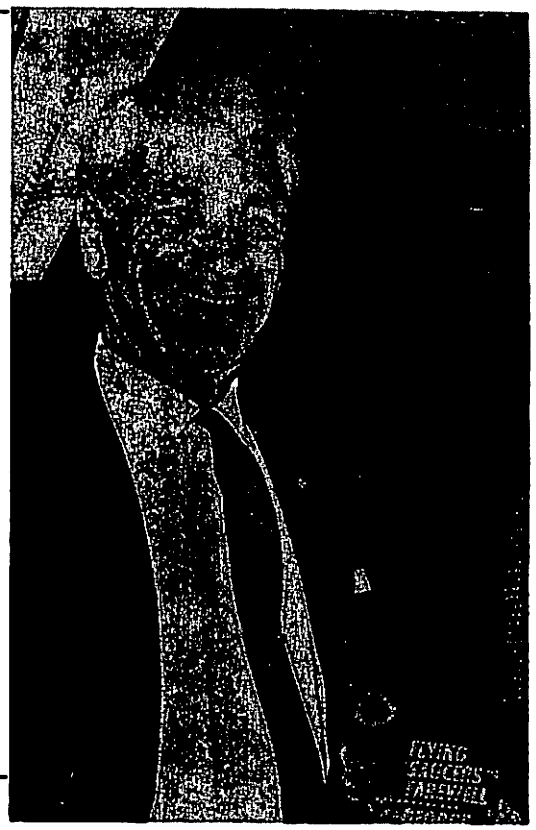
宇宙哲学を学び応用することは、自己の人格の向上を目指すことばかりではなく、望ましい人生をすごして悔いのない生涯を終えることをも意味する。人間の内部には無限の力と可能性が潜在するのであって、それをどの程度まで引き出すかで成功と劣敗の差が生じるのである。ところが一般人は自己の力をみずから限定し、過少評価し、自分はダメ人間なのだと思い込む。思い込むこと自体も一種の信念であるから、実際にそのとおりになり、本当のダメ人間になってしまう。こういう人が世の中に充満しているのである。

私たちはこうした人の低次な習慣的想念に同調してはならない。「信念の力だけで何が成就するものか。人間は毎日こつこつと働くだけで精一杯なのだ」と悲観的な言葉を吐く人に同意してはならない。それは全く宇宙的でないからだ。

「私の辞書に悲観や不可能という言葉はない」と断じて、常に澄んだ眼差しで輝くばかりの微笑を浮かべて、力強くミラクル・ワードを唱えよう。そうすれば救われこそすれ悲運に泣くことは決してない。しかもこれは宗教ではないし哲学や道学でもない。宇宙の法則の応用である。我々に宗教団体は無用である。それは百害あって一利もない。簡単なミラクル・ワードを唱えることによって――つまり信念の魔力を応用することによって――自分自身をどのようにも変化させ得るのである。

ただしひどく成績の悪い高校生がミラクル・ワードをいかに熱心に唱えても一流大学に入れない場合は、「入学しないほうがよい」という示唆を与えられているのであるから、あっさりと諦めて転身を図るべきである。また信念の力は悪事にも応用できるが、そのカルマとして自然から代償を要求される時が必ず来るから、この力は良き事のみに応用するのがよい。エゴの発揮のために用いれば、それなりの応報があるのである。

地球人に欠けているのは信念の力とイメージを描く能力だといわれている。



●ジョージ・アダムスキーの遺稿より

創造主のハート

人間は創造主のハート（心）を求めてきましたが、それを発見できない場所をいつも見ています。なぜなら人間は事物の結果を見るだけで、創造主のハートである〝因〟を見ないからです。

いままでに多種類の思想や、さまざまの指導者、説教家がときどき世の中に出現して、創造主に関して絶えず語りましたが、いずれも事物の現象、すなわち表面について説くだけで、事物の中心すなわちハートの中にまで入り込むことはほとんどありません。そして人間は表面から得られる知識を求めてきたために真の知識を見つけることはありませんでした。表面というものは真の知識を内蔵する殻にすぎないからです。

肉体内のハート

創造主のハートは人間の内部だけや、その他、特定の物の内部に存在するのではなく、万物の内部に潜在します。それは（創造主のハートは）宇宙の中心であって、そこから大いなる光、意識、理解の径路が放射されているのです。

むかし人間は肉眼で見える物のみを礼拝して、見えない物を礼拝しませんでした。また各民族のなかで〝無限なる者〟のハートを見たり理解できるといえる民族は少数しかいませんでした。

人間は自分のハートが肉体内で作用している限り、その期間、活動できますし、知的物体として認められます。ハートの働きが止まると、ただちに他のすべての部分も停止します。

また人間は創造主のハートを理解しない場合、向上する状態にならないで崩壊の状態で生きることになります。人間は本当に自分自身を傷つけているのです。

ハートは報いを求めない

一方、ハートによって活動する人は、他人を利用しません。なぜならハートから来るものは、実際には創造主のハートから来るものであるからです。しかも創造主は自分の子供たち（人間）から、いかなる報いをも要求しないのです。

また人間たちが創造主を褒め称えても褒め称えなくても、創造主は何も言いません。創造主は人間たちがその贈り物に対してどんなに感謝しても、全く意に介することはありません。

創造主がなし得るのは「与える」ことだけです。創造主はハートから与えるのであって、マインドから与えるのではないのです。

（訳注＝ハートは人格の中心となるべき愛情ある心を意味し、マインドは判断・思考・意志などの働きをする心）

私たちがマインドでもって与えるとき何かの報いがあるだろうと考えます。しかも、これこそ人間のすべてがやっていることなのです。

創造主はそんなことはしません。したがって、人間はハートによって働くならば、相手から報いを受けようとしないはずです。このような人こそ、通常、多数の人の〝光〟となるものです。しかも、このような人こそ常に他人から大切にされるのです。一方、奉仕を行って報いを期待する人はまず幸福にはなれません。

不幸な人とは

不幸な人とはそんなものです。本人はハートによって行動しないからです。こんな生き方をする人は、生命が流れ込む径路をふさぐにつれて、病気になるか、肉体を崩壊させるでしょう。動脈硬化、心臓病、耳痛、その他の病気にかかるかもしれません。

これは多少とも表面の世界（結果）によって扱われているからです。表面というものは、この特殊な有機体（肉体）を助けるための英知や力を本来持たないのです。一般の個人がハートによって生きていないことはあまりに明白です。

利己的な力は決してそれ以外の生き方をしません。人間は表面の世界だけで生きるとき――表面の世界は限定された視覚の世界です――そのような生き方をす

る人にとっては他の多くの物事も限定された世界になってしまうのです。すると未来に何が起こるかはわかりませんし、これを持とうか、あれを持とうかと考えて絶えず迷うことになります。

一方、人間がハートによって生きるならば、このような状態におちいることはなく、健康その他の面で向上するのに充分な力を持つことになります。

必要な物は与えられる

創造主は人間が利用し得る以上のものを持っています。かりに私たちが数十億年生きるとしても、不足する物は全然ないでしょう。創造主は人間の内部のハートを通じて多くの人に絶えず必要物を創り出すからです。人間の内部でハートが働くとき、それは人体のためにありあまるエネルギーを創り出します。

内部のパワーの指示に従うこと

「あなたの（創造主の）意志」という言葉が何を意味するかを、どれだけの人が理解しているでしょう。私が片腕を動かすとき、それは腕自身の力によるのでしょうか。違います。それは〝中心の力、すなわち意志〟または私という人間の〝創造的英知〟の力にゆだねているのです。そこで腕は〝創造主の意志〟すなわち私の意志が与える指示に従って動きます。

この腕はある種の仕事をやるように命じられますが、油まみれになったり、汚れるような物にさわったりしたことがないために、その仕事をやりたがりません。そして、指示に対して反抗します。反抗することが許されるならば、やれと命じられたことをやらないでしょう。腕は言います。「なぜ、おれがこんな事をしなければならないのだ」

しかし本人の自我の中には、「与えられた指令に従って行動せよ」と言って、この腕の意志に語りかける〝パワー〟が存在します。したがって腕は、本人の〝最奥の意志〟に服従する必要があるのです。この最奥の意志とは神の意志であり、神人一体なるものであり、人間の内部の中心的な力でもあります。

ところが人間の腕はそれ自体の意志の力を持っていますから、「なぜ、おれがこれやあれをしなければならぬのか？」と言うでしょう。腕は行動することを拒否できますし、大抵の場合は拒否しているのです。

二つの意志の争い

人間の意志は、私たちが歩行と呼んでいる足を動かせる動作のように、肉体を動かします。あらゆる動作は〝最奥の自我〟から指令されるのです。動作によってはうまくゆかない場合もありますが、これは多くの面で姿をあらわす肉体の意志が、「なぜ、おれはこんな事をやらねばならないのだ」とか「なぜ、おれはこんな物を見なければならないのだ」などと言うからです。しかしやはり、動作を行うべきだというフィーリングは存在します。

これで、二つの意志が働くことがわかります。一つは至上なるもののハートから来るもので、他の一つは肉体意識の表面から来るものです。後者は無知であるために、あらゆるものと争います。〝最奥の自我の意志〟の存在を知らないからです。

〝最奥の自我〟は肉体意識の〝ハート〟

ここでトウモロコシの粒[2]を例にあげてみましょう。トウモロコシについて何も知らない人は、その粒が自我から生じるのだということを理解しないでしょう。しかしこの粒は最奥の自我、すなわち粒の中心であるハートにより現象化し始めるのであって、そのために茎みたいに出て来て、更に多くの粒がなるのです。このハートがこんなふうにして働き始めると、それは少しずつ出現し始めて、現象の世界に入ってくるのです。

小鳥の歌も内部のパワーから

万物もこれと同様です。小鳥は自分の歌をどこから得るのでしょうか。それは最奥の自我からわき起こるのです。表面から歌が出るのではありません。また小鳥はその歌をどのようにして伝えようかとか、表現しようかなどと思いわずらうことをしません。小鳥はただ歌うだけでそれだけのことです。これは植物の場合も同様です。私たちが何を取り上げようとも、その内部には知的に働いているある〝中心的なパワー〟が存在するのであってそれがその物を導いているのです。

万物には中心がある

宇宙の万物の中には実際に〝中心〟がありますが、人間の内部にもそれがあります。力と英知が放射されているこの中心部は〝創造主の王座〟と呼ばれます。それは〝自然、力、英知の王座〟であって、機械的な分野で見受けられるように服従することはありません。自動車の車輪は中心部から来る力で回転し、中心部によって維持されています。そのパワーはハブの中心にあるのです。

動機となるパワー

人間は何を考慮に入れようとも相違はありません。ただ、動機となるパワーが中心部に存在し、それが末端部にまでパワーを伝えているのです。そして末端部は中心部から来るパワーの結果にすぎないのです。したがって人間はハブをできるだけ強固に作る必要があります。それがパワーの中心となるからです。

真の人間

私たち人間にも同じ事があてはまります。人間の最奥の中心部が、生きて働いている人間なのであり、これこそ覆い物の中に存在する〝真の人間〟なのです。この覆い物は肉体と呼ばれています。

久保田八郎訳

〈アメリカGAP本部研修〉紀行

久保田六郎

愛と太陽の大地

去る六月十五日から七月八日まで、筆者は米GAP本部からの招待により、カリフォルニア州南部のビスタに滞在してアダムスキー問題や宇宙哲学に関して研修を受けた上、九日に無事帰国した。この旅行の実現のために有形無形のご援助をたまわった多数の会員各位に対し衷心より感謝する次第である。

以下は現地で多忙な日程の合間に書き綴った手記であるが、抽象的な表現はなるべく避けて日々の行動を平易に日記風に書いたものである。これによりビスタの本部の方々の宇宙的な生き方と、夏のカリフォルニアの素晴らしい情景が少しでも読者に伝われば幸いである。

× × ×

六月十五日。いよいよ米カリフォルニア州ビスタのGAP本部訪問の旅の出発日である。昨年から計画していた重要な旅行だが、四月の病気以来、身辺がごたついて、果たして行けるものかどうかと危惧の念につきまとわれる一方、いや、必ず行ける、もうビスタへ行っているんだと強烈なイメージを描き続けた甲斐があったのか、ついに実現することとなった。

大荷物をまとめねばならぬが、これは出発の前日に急速にやってのけた。旅慣れているからというよりも、土壇場にならぬと勇猛心が起こらぬという悪いクセのせいかもしれない。

正午に遠藤君と野口さん（静岡支部代表）が車で迎えに来る。荷物を玄関先から階下へ降ろして車に積み込み、それに私と塙君の四人が乗り込んで出発し、あとを浜村君が自家用車で追いかける。薄曇りで快適なドライブだ。

千葉街道へ出て約一時間後に成田空港へ着き、両ウィングの中央部外側にいると大久保君（東京）が見送りに来た。六人で食堂へ入って昼食をすませ、しばらく休憩したあと、三時頃に南ウィングのノースウェストのカウンターへ行くと、菅原恵子さん、菊地啓子さん、坂本節子さん、望月淑子さん、松本さんなどがすでに来ておられたのに恐縮した。やがてワールドセブントラベル社の田中氏が来られて、カウンターで手続きをすませ、一切を完了して、四時すぎに皆さん方と別れの言葉を交わしたあと、出国管理事務所へ降りて行った。ここの検査を難なくすませて出国ロビーを歩きながら階上

●成田空港にて。左より塙，菊地，坂本，野口，菅原，遠藤，浜村，田中，松本，筆者，大久保の各氏

を見ると、皆さんがしきりに手を振っている。しばしの別離の哀愁を感じながら私も手を振り、やがて思いきって手荷物検査所を通過した。しかし助手として同行する塙君の荷物中にあった写真複写用のコピースタンドの柱を検査官がとがめて、これだけは別送にすると言う。七五年に同君と最初に渡米したときも、持物が税関でひっかかったが、察するに異様な長髪が目立って怪しまれるらしい。

サテライトで暫時待機したあとノースウェストのジャンボ機8便に乗り込む。乗客にはアメリカ人が多い。赤ん坊をつれた白人も何人かいる。彼らは団体でなく、主として家族づれで日本へ観光に来るのだが、これは勤務先から休暇が一ヵ月も取れるからである。二週間の休暇を取るのが至難の業という日本の企業にくらべれば、うらやましい話だ。

ジャンボは予定の五時四十分を少し遅れて離陸した。海外旅行歴わずか六回という私は、まだ飛行機を汽車なみに感じられないが――といっても国内外合わせて五十回ぐらいは飛行機に乗っただろうか――、それだけに結構楽しくて、恐怖心は全く起こらない。もちろん日本GAPの主宰者たる者が恐怖心などを起こすようでは話にならないが、乗物に乗ると眠れぬ性分なので、バッグから英会話の参考書を二冊出して読み続けた。いかなる英会話の参考書といえどもみな内容が違うから、どれを読んでも面白いし、読みだしたらきりがつかないので、時間つぶしにはもってこいだ。

夜間飛行に入ってから機内が冷え始めた。これはよく心得えているので、用意した長そでのアンダーシャツとモモヒキをバッグから取り出して、トイレの中で着込んだ。今春の罹病以来健康管理には慎重になったので躊躇はしない。座席に帰ってから更に膝の上にそなえつけの毛布をかけると、すっかり暖まった。

機は八時間十七分の平穏無事な飛行後にシアトル空港に着いた。ここのイミグレーションがおそろしくのろいことは本誌68号の「アメリカ中米宇宙考古学の旅」の記事で書いたが、偶然にも昨年と全く同じ位置の行列に入らされて待機することになったのに、やはり長蛇の列は容易に進行しない。しかし今度は乗り継ぎまでに二時間半もの余裕があるから、落ち着くことができた。やがて係官にパスポートや入国カード等を渡すと、相手は質問してきた。一体にアメリカ人は、日本人が英語をしゃべるのは当然だと思っているから、この係官も早口でまくしたてる。行先がカリフォルニアのビスタと記入してあるのを見て、「ビスタという町はどこにあるのか」と尋ねる。「南カリフォルニアだ」と答えると「サンディエゴの近くか」と聞くので「ノウ」と言うと「エスコンディドの近くか」ときた。「そうだ、そのとおりだ！」と勢いづくと「自分はビスタの出身だ、ビスタはホームタウンなのだ」と係官が言う。「ほほう、これは驚いた！」と歓声をあげると、係官も微笑し、スタンプをポンと押してパスポートを返してくれた。何のことはない、私を試していたのだ。

ここを通過して、荷物引渡所へ行き、スーツケース類をベルトコンベヤーから取り出し、税関へ入ると、太った係官が「土産物を持っているか、持っていればその金額は合計いくらになるか」と質問してきた。さあて困った、沢山あるので正確には記憶していない。「覚えていない」と正直に答えると、深刻な顔をして猛烈な早口でしゃべりだした。土産物を一つ一つ引っ張り出して金額を思い出そうと、ごそごそやっていると、日系人女性の係官が来て、日本語で質問した。その内容は全くの通り一辺なもので、こちらの返事を聞くや否やOKときた。拍子抜けしてスーツケースを押しながら進行するのに、どうしたわけかスーツケースの中味を見せろと言わない。要求もされぬのに、こちらからお見せしましょうと言う必要もあるまいとばかり、奥へ進行して、「ロサンジェルスへ行くのだが荷物をどこへ置けばよいか」と別な係員に尋ねると、左奥へ持って行けと指さす。見ると若い男が一人で荷物を次々とベルトコンベヤーに乗せているので、そこへ行って渡すと、非常に親切な態度で引き受けてくれて、ノースウェストのロビーへ行ってS7のゲートへ行けと教えてくれた。

ところが別送になったコピースタンドの柱をここで受け取るのだと塙君が言うので、若い女性の係員にタッグを見せると、あちこち探してやっと見つけ出したが、女性はロサンジェルスまでまた別送すると言う。径三センチ、長さ五十センチばかりの何の変哲もない丸い金属の棒なのに、この融通のきかない態度にうんざりしていると、数名の男の係員が棒を手にして、「これは何だ？」と尋ねるので、写真の複写用のスタンドに付属している柱だと答えると、OK、OKと笑いながら、渡してくれた。最初から別送にする必要はないのに、成田空港の係官がそうしたのは、機内で凶器がわりに使用されるのを警戒したのだろう。

とにかくこれで荷物は全部そろったので、一安心してノースウェストのゲートS7の前で少憩する。

レイニア山とセントヘレンズ山を遠望する

定刻の十二時四十五分にノースウェスト20便で出発した。米国内線なので日本人は少ない。しかもガラあきだ。上昇してまもなく、左下方に富士山に似た白銀の美しい山が見えてきた。これはひょっとするとレイニア山ではないかと思ったが、定かでないので前の席に座っている若い白人カプルの男に尋ねると、やはりそうだった。一九四七年にケネス・アーノルドが自家用機でこの山の上空を飛行中、黒い九個の円盤を発見してから「フライング・ソーサー(空飛ぶ台皿)」という名称が生まれたといわれている。UFO研究家にとっては重要な場所である。若いカプルは親切で、次々と出現する有名な山の名を教えてくれる。

そのうちに、機内のアナウンスで、先般、大噴火したセントヘレンズ山が見えるというので左側の窓から見降ろすと、ぽっかりと開いた巨大な噴火口からものすごい大噴煙がわき出ている。壮観な光

景だ。この旅客機はいい場所ばかり見せてくれると喜んでいるうちに、いつしかロサンジェルス空港に着陸した。所要時間は二時間十五分である。

なつかしのビスタへ

成田空港で野口氏が買って下さった手押車に私の手荷物二個を乗せて歩いたが、これは大助かりだった。三個の荷物を巨大なこの空港の長い通路を手に持って歩いたらエライ目に会ったことだろう。

通路を歩いて出口まで行くと、いた！ホワイティング氏の人なつこい微笑と、イングリッド夫人、エリシアちゃんの笑顔も見える。やあやあと簡単に挨拶し、つれ立って荷物受取所へ行き、スーツケースを引っ張り出してから、一緒に外の駐車場へ行く。かなり長い距離なので、暑さのために全身汗びっしょりになる。

大駐車場においてあった車に一同乗り込んで、ビスタへ向けて出発した。時速約百キロでハイウェーをぶっ飛ばしながら、いろいろと語り合ったが、そのうち機内の寝不足がたたって、うとうとし始めた。笑声に眼を覚ますと、二人がうしろを見て笑っている。私が眠り込んだのがおかしいらしい。

車は一路南カリフォルニアの沿岸沿いに南下する。アメリカ西部訪問四度目の私には見なれた風景だが、この辺一帯はいつ眺めてもすごく明るい開放的な雰囲気を感じる。家屋はすべて平屋で、日本のような二階建の家は見あたらない。これは地震を警戒するためである。平屋ならすぐに外へ飛び出せるからだ。

アメリカGAP本部が存在するビスタという町はカリフォルニア州の南部に位置し、サンディエゴの北約八十キロの地点の海岸町オーシャンサイドから約十キロほど内陸寄りの地点にある小さな美しい町である。町名の Vista というのはもとスペイン語で、英語の view（眺め）に相当し、むかしは Vista Hermosa（美しい眺め）と呼んでいたらしいが、いつのまにか形容詞のエルモサがとれてビスタになってしまった。丘陵の多い緑豊かな静かな町で、アダムスキーは他界するまで四年間ここに居を構えた。その家は後に「ジョージ・アダムスキー財団」として残り、ここでアリス・ウェルズ夫人が理事長として活動を続け、これを助けるマーサ・ウルリッチさんの二人が居住してきたのだが、ウェルズ夫人は老衰で寝たきりだと聞いている。したがって実質的な活動はすべてステックリング氏夫妻とホワイティング氏によりス氏の家を本拠にして行われており、これを私たちは米GAP本部と呼んでいるのである。

疾走約二時間にして、ビスタの町へ到着し、宿舎のガーデン・モーテルへ着いた。日本ではモーテルというとよくないイメージが浮かぶけれども、アメリカでは一種のドライブイン・ホテルで、要するに車で旅をする家族のための宿舎であって、室内には台所の設備もあるから、食料品を持ち込めば食事は安上がりにつく。私たちの部屋は裏手にあり、ツインになっているのだが、戸をしめれば部屋は二つに分かれるようになる。このモーテルも平屋で、広大な敷地の中に棟が分散し、中庭にはプールもある。

一時、室内に荷物をおいて、再度、車でローズドライブ（通りの名称）のステックリング氏の家に行く。彼は十六日に帰る予定だったが、前夜すでに息子さんのグレン君が操縦するセスナで一緒に帰宅していた。ワシントン市へアダムスキー問題の講演に行ったのである。

五機の巨大な母船

屋内に入ってからス氏と挨拶を交わして旧交をあたためた後、裏庭へ出てホワイティング氏が築いたミニ熱帯庭園を見ながら本人と語り合っていると、庭へ出て来たイングリッド夫人が加わり、アリス・ウェルズ夫人の病状を伝えてくれた。相当に老衰して余命いくばくもないような状態らしい。八月中旬に日本GAPの団体旅行で再度ビスタを訪問する予定だが、それまでに体がもてるかどうか懸念される。

居間へ入ってス氏が言うには、彼がワシントン市から飛行機で帰る途中、上空で五機の巨大な葉巻型母船を目撃したけれども、写真に撮る余裕はなかったという。五機が一列横隊に並んでいたらしい。

やがて裏庭で夕食会が始まった。ホ氏がバーベキューのセットで焼いた肉にサラダその他を大皿で回し、それを各自の皿に取って食べる。肉はかさかさして、どうにも私の口に合わないが、素敵なパーティーだ。あれこれと話し合ったあとやおら私は皆さんに土産物をくばった。一同は大喜びする。

この家にはニカカイと名付けられた白いメス犬がおり、実によくなついて、だれにもじゃれつくが、特にイングリッド夫人に甘えるらしい。

●イングリッド・ステックリング夫人

次第に空気が冷えてきた。この頃から南カリフォルニアは湿度が低いので夜間はかなり冷えることがわかってきた。あまりに寒いので、やがて一同は屋内の居間へ入り、四方山の話を続けているうちに、グレン君が入って来た。たくましい大男に成長し、活発に話すので、わが子を見るように嬉しくなり、いささか感傷的になる。

十時半頃、さすがに旅の疲れが出たので同家を辞した。ス氏とホ氏が車でモーテルまで送ってくれた。明日は昼の十二時に迎えに来ると言う。私は睡眠薬を飲んで熟睡した。

翌十六日は朝八時に起床した。仕度をして塙君と一緒に付近のスーパーマーケ

ットや商店などをのぞきながら散策する。持参した旅行用アイロンがだめなので、スーパーで大き目の旅行用アイロンを買った。取手が横に折りたためるようになっている便利なもので、てっきりアメリカ製だろうと思ってよく見ると台湾製だった。ちなみにビスタの電圧は百二十ボルトで、コンセントの穴は日本のそれと全く同じである。しばらくぶらついたあと、二十四時間営業のレストランへ入り、軽い朝食をとった。二人で六ドル七十セント。店はきれいだ。ゆっくりと食事をして、店を出たあと、いったんモーテルへ帰って、待っていると、十二時にス氏が車で迎えに来た。またス氏の家へ行く。

今日は快晴で、日ざしを浴びると暑いが、日陰に入るとひんやりして寒いぐらいである。裏庭へ出ると暑くて汗ばんでくる。この家の敷地は意外に広くて、約三百坪はあるだろうか。日本なら相当なものだ。彼は家つきのこの地所を六年前に格安で買ったが、現在は三倍の価格にはね上がったと語る。それでも日本では信じられぬほどの値段だ。

そうこうするうちに、ス氏が今日は彼の勤務先ホテルのあるラコスタの町へ案内すると言いだしたので、我々と三人で出かけた。日ざしは暑いが絶好のドライブ日和である。途中、まずビスタ町のパロマー空港へ立ち寄った。狭い滑走路の手前に数十機のセスナやその他の小型機が並んでいる様子はオモチャの飛行機みたいだ。ス氏とグレン君は、ときどきここで小型機を賃借りして操縦するのである。四人乗り機で一時間三十五ドル、二人乗りなら二十八ドルだという。ナチスドイツ時代のハーケンクロイツのマークをつけた古い飛行機があるのにおどろいて、尋ねてみると、これはヒットラーがムッソリーニを救出したときの飛行機と同じ型のもので、だれかが趣味に所有しているということだった。

ラコスタはビスタとサンディエゴの中間に位置する小さな町で一種の保養地である。緑の豊かな環境の中にス氏が勤めるホテル・ラコスタがある。都会地に見られるような巨大な建築物ではなく、広大な敷地に分散する木造の低い棟から成るが、収容人員は六百名。内部は豪華そのもので、裏にはプール、テニスコート群、ゴルフ場等の設備があり、保養地として、こんな素晴らしい場所を見るのは初めてだ。

プールのそばの芝生で丸テーブルを囲んで座り、コーラを飲みながらス氏と語り合う。空気が乾燥しているせいか、木蔭に入ると寒くなり、一メートルほど体を動かして日光をあびると汗ばむほど暑くなる。

●ホテル「ラコスタ」の裏庭でス氏と語る

ハリウッドから有名な映画俳優や芸能人もここへよく避暑に来るらしい。そこで、今夏八月のGAPの団体旅行で、ここへ一泊したいものだと冗談まじりにス氏に話すと、彼は笑いながら答えた。

「それはむりでしょう。このホテルはすごく高くて、素泊りで一泊六十ドル、その他、食事などを加えると一人百ドルは取られるから、やめといたほうがいいですよ」

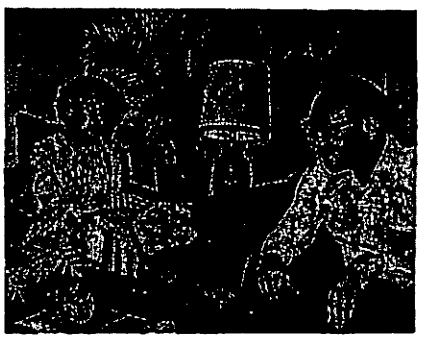
再度、ス氏愛用のダットサンに乗り込んだ三人は、八車線道路をぶっ飛ばして海岸線に入る。陽光きらめく南カリフォルニアの砂浜ぞいのハイウェーを疾走するのは爽快この上ない。ス氏は日本製の小型車が経済的で、すごく優秀だとベタぼめにほめる。

途中、高い崖から海の上空へ飛び出るハンググライダーが五、六機眼についたので、車を停めてしばらく見学する。風が強く、グライダーには絶好の場所で見物人も結構多い。

ハンソン夫人との再会

夕方、ス氏の家に帰ってみると、ジェネビーブ・ハンソン夫人が来ておられた。彼女はアダムスキーの妹であったが(姉というのは誤りである)、十一歳のときに死亡し、その後また女性としてイリノイ州で転生したあと、一九六三年にア氏の体験記を読んでいたく感動し、ビスタのア氏の家を訪問して会見した。そのときア氏が眼を輝かして、「あなたは私の死んだ妹の生まれ変わりだ」と言って、非常な親愛感を示したという。現在はビスタに住んで本部の人達の援助を続けている。もの静かで、穏和な、上品な印象を与える夫人である。あれこれと話し合っていると、イングリッド夫人が奥から大きな絵を持ち出して見せた。ア氏が描いた仏像で、描き方は素人の域を出ないが、何か異様な感じのする作品だ。

●ハンソン夫人



その他、ス氏とイ夫人が交互に興味深い物を見せてくれたり、話をしたが、ここには到底書ききれない。

絵画の話を続けるうちに、メキシコのマリア・クリスティーナ・デ・ルエダ夫人の話題に移った(同夫人に関しては本誌第62号の筆者の記事「太陽と神々の国を訪ねて」に詳述したので参照されたい)。

驚いたことに同夫人は今年一月に逝去されたという。全く知らなかった！　そこで、同夫人所有のアダムスキーが描いたイエスの肖像画はどうなったのかと尋ねると、ア氏に関心のない家族が、彼女の棺の中にその絵を入れて焼いてしまったという。全く残念なことをしたものだ（本誌第62号の表紙写真として掲載）。

ステックリング氏は金星の事や宇宙の法則について多くを語ったが、テープに録音することもメモすることも禁じたので、すべて記憶しなければならない。忘れっぽい私にとっては大変な事だ。

アメリカは現在サマータイム（夏時間）を実施中なので、八時半というのに実際は七時半で、外は東京の夏の五時頃のように明るい。

やがてダイニングキチンでディナーが始まった。鳥肉にサラダその他を大皿に盛ったものを各自で皿に取る。狭いのでテーブルには私と塙君、ス氏とホ氏の四人だけがすわり、そばの高いカウンターにむかってハンソン夫人とエリシアちゃんが止まり木に座って食事をする。なかば立ち食いである。こうした光景はいかにもアメリカ的だ。というよりも宇宙的な人々の集まりだから、格式ばらないのだろう。

食事のあとでホ氏とイ夫人が私の出身惑星や、今後のあり方について重要な話を始めた。そして万人に対して、もっと包容的になれと力説する。私の性質を見抜いたのか、それとも日本からこの頃ここへ手紙を出す人がふえたために、その内容から判断したのかは知らぬが、言い得て妙ではある。たしかに私は低劣な人間を相手にしないクセがあるし、だいいち、大集団をかかえていれば統制に一種の技術を応用しなければならず、国情の相違もあって、大変なのだ。だが彼らの示唆は傾聴に価する。私は感謝した。

続いて塙君にも指導があり、私が通訳して質疑応答が続いたけれども、プライベートな問題なので省略しよう。

十一時になって、ホ氏が車で宿舎まで送ってくれた。自室へ帰ってから深夜二時まで原稿を十枚ほど書いて就寝した。この記事は、毎夜、数枚ずつ宿舎で書きためたものである。

重態のアリス・ウェルズ夫人

十七日。熟睡したけれども早朝五時にポカッと眼覚めてからあとは眠れない。仰向けになっていると、さまざまの想念が去来する。

九時に中年のメイドさんが来て、掃除すると言うので、十二時に出かけるから待ってくれと答えて起床する。昨日、スーパーマーケットで買った台湾製旅行用アイロンでシャツやズボンをプレスすると、すごく効率がよい。十二時にステックリング氏が車で迎えに来たので我々と共に三人でス氏の家に行く。もはや慣れてしまい、他人の家のような気がしない。居間でくつろいでいると、イングリッド夫人がア氏関係の写真集や資料などを持ち出して見せてくれたが、ここで詳述する余裕はない。

そのうちハンソン夫人が見えたので、個人的な事をしばらく話し合う。

四時頃にス氏が、これからアリス・ウェルズ夫人の家へ見舞に行って、そのあと一同で隣町のサンマルコスのレストランへ行くと告げた。

車で出発してまもなくアリスさんの家に着いた。奥の彼女の寝室へ案内されて入ってみると、重態だと聞いていたのに意外に元気そうにベッドの端に腰かけて、私を待っていた。しかし八十歳の彼女は老衰しきっており、昨年とは打って変わってやつれた姿に見える。人生の終焉に近づいたばくもないという風情だ。声も不明瞭で理解しがたい部分があるため、その都度聞き慣れているイングリッドさんが正しい英語に直してくれる。

憔悴しきった姿を見て私は胸が熱くなり、言葉は出ない。彼女は何を思ったのか、イ夫人に命じてロッカーからアダムスキーのクリスタルペンダントを出させて、胸につけてみよと言う。これは一九七五年に初めてここを訪問した際に見せてくれた重要なア氏の遺品で、ア氏が若い頃にスペースブラザーズから与えられたものである。金星の物品なのだ。

彼女は私が来たことを心から喜んでいるようで、何か質問はないかと言う。私はア氏の逝去後のことについて簡単に尋ねただけで、あとは黙っていた。

この家（アダムスキー財団）を辞してから一同はサンマルコス湖に面したレストラン「クェイルズ・イン」へドライブする。ここは素晴らしい場所で、一種の行楽地となっており、レストランも、きな立派な店だ。

私は八ドル九十五セントの肉を注文したが、味は口に合わなかった。広い店内の客はすべて白人ばかりで、今日が誕生日だという客のまわりにウェートレスが四、五名集まって、ハピーバースデイトゥーユーの歌をうたって祝う。

西洋人は誕生日を記念するけれども、東洋人は死を悼む傾向があると私が話すと、それは良くないとホ氏が言う。宇宙的な転生の法則からすれば、当然、誕生を祝うべきだと彼は力説する。

食事が終わってから全員で湖畔に出てアヒルにえさをやって楽しみ、記念撮影をしたあと、サンマルコスの山の手ともいうべき住宅街を車で見てまわった。広い芝生に囲まれた平屋の美しい家が並んでいるのを見ると、日本人の家作りと白人のそれとに、どうしてこうも相違があるのかと歎息せざるを得ない。

康子さんのアパートへ

ビスタへ帰ってからホワイティング氏がセルチャウ康子さん（旧性は馬場。大阪出身）の家へ寄ろうと言いだした。モダンなアパートに彼女一人がいたが、ホ氏と我々の三人で入り込んだ。セパレートの立派なアパートで、広いベッドルーム、リビングルーム、ダイニングキチンで構成される八十平米位のアパートの家賃は月に二百六十ドル（約六万円）とのことで、彼女によると高いという。しかしアメリカ人の収入は日本人のそれよりも多いから、むしろ安いのではあるまいか。ご主人のセルチャウ氏はホワイティング

●サンマルコス湖畔のレストラン「クェイルズ・イン」のそばで。左より塙，ステックリング氏，イングリッド夫人，そのうしろはホワイティング氏，エリシアちゃん，ハンソン夫人，筆者。（セルフタイマー撮影）

氏の紹で、今は勤めに出て留守だということだった。康子さんは古くからの日本GAP会員で、大阪在住時代にビスタの本部を訪問し、そのときセルチャウ氏に見染められて結婚した。在米二年以上になるから英語もかなり達者である。一時は苦労していると聞いたが、今は楽しそうだ。大きなデパートに勤めているという。

●康子さんとセルチャウ氏

アメリカには自由があり余るほどあり、のんびりしているので日本へは絶対に帰りたくないと彼女は語る。いろいろ話し合っているうちに、ホ氏がハンソン夫人のアパートへ二人で行ってみようと言うので私と二人で出かけた。わずか数軒隣りのアパートの一階に彼女が一人で住んでいるのだ。年齢は六十五歳だが、ご主人を失い、現在は息子さんも成長して孫があるほどで、イリノイ州の自宅を離れて、このビスタへ移住し、GAP本部の仕事を援助しているのである。格調高いアメリカ英語をゆっくりと話す人なので、まるで日本語を聞くように明快に響いてくる。

ここでビールをご馳走になりながら十一時頃まで語りあって辞去した。

コンタクティーは他にもいる

十八日。早朝三時に目覚めてから、あとは眠れない。しかし九時頃にまた眠り込んで十一時すぎにやっと目が覚めた。大急ぎで洗顔や入浴をすませて身仕度をすると、十二時半にス氏が車で迎えに来た。彼の家へ行く途中、ある惑星に関して重要な話をしてくれたが、それは大体に私が予想していたことで、別段ひどく驚かなかったけれども、考えさせられる問題ではあった。

家に着いてからス氏はある科学者のコンタクティーの話をしてくれたが、とにかくアダムスキー以外にも円盤や母船に乗せられた人はいるらしい。だがス氏はこの科学者の氏名その他の身許に関しては詳述するのを避けた。こういう場合には決して深くせんさくしないほうがよいので、それ以上は私も追求しなかった。

午後二時三十分に、我々二人とス氏の三人だけで車を飛ばし、オーシャンサイド付近のサンルイレイ教会へ見学に出かけた。一七九八年にスペイン人が建てた典型的なスペイン風教会で、広大な敷地の中に大規模な形で残っている。この地方に昔住んでいたインディオ達が建設や維持に使役されたらしい。

そのあとオーシャンサイドへ行き、ハ

ーバーを見てから、オーシャンサイドとビスタの中間部にあるシアーズデパートへ入り、シャツを物色したが良いのがないので、地下のショッピングセンターへ行くと、なんと東京にも見られないような巨大な地下商店街が建設されているのに大いに驚き、かつてス氏やホ氏が来日した折、得意になって銀座や新宿を案内して歩いたのが恥ずかしくなってきた。この商店街へ入れば、何でも入手できるし、価格もわりと安い。

シャツを一枚買ったあと、ス氏の車で氏の家へ帰り、ある重要資料に眼を通す。

夕方六時頃、セルチャウ氏と奥さんの康子さんが来て、全員のディナーが始まる。料理はス氏が腕をふるったメキシコ料理で、すごくうまい。サンフラワー油独特の匂いが、二度にわたるメキシコ旅行をなつかしく思い出させる。

食後、私は居間で重要資料を読み続け、塙君は食卓に残って、イングリッド夫人から、もっと他人に親身になって親切をつくすようにしなければだめだと、康子さんの通訳で諭されていた。

十一時になって、ホ氏の車でセルチャウ夫妻と共に同乗して宿舎前で別れた。

デザートセンターを上空から視察

十九日。今日は飛行機でデザートセンターへ飛ぶ日だ。天候は上々である。この地方は朝方どんよりと曇って、いまにも雨が降りそうな空模様だが、十時すぎから晴れ始めて、昼頃は快晴となる。毎日このパタンを繰り返すのだ。海側からの気圧によるというが、おかしな天気があるものだ。

一時前にス氏の車でビスタのパロマー空港へ行くと、すでにグレン君が使用機パイパー・アーチャーII型の出発準備を始めていた。操縦桿は彼が握り、そばに父親のス氏が座って、あれこれと指導する。後部席の右側には私が座り、左側に塙君が座る。

一時五分に離陸した。グレン君は将来旅客機のパイロットになるために飛行練習をやっており、この飛行も彼には一種の訓練になる。しかし見事な操縦だ。やがてエスコンディドの町が眼下に見え始めた。私はニコン二台を駆使して撮りまくった。パイロット免許を持ち、かなりの飛行時間を持つス氏は地理に精通しているので、眼下を見下ろしながら、あれこれと教えてくれる。遠くにビッグベン山の白銀の頂上が美しく輝き、左方になつかしいパロマー山が見える。豆粒のような天文台の白いドームが次第に大きくせり上がってきた。高度を下げて旋回する。今夏も六十名の団体で再度ここへ来るのだ。

機は上昇してスピードを出す。高度は三千メートル程度で、時速は二百キロを少し超える。新幹線なみだ。空は一点の雲もない日本晴れ、いやアメリカ晴れですごく快適な飛行である。飛行機に乗るのが面白くてかなわぬ私には、もう少し揺れてくれればよいのにと思うほど安定した素晴らしい飛行だ。機内はシャツ一枚で少しも寒くはないが、右下の穴から

●ビスタ，パロマー空港にて搭乗前。左より筆者，グレン君，ステックリング氏，塙。（セルフタイマー）

冷風が吹き込んでくるので、上衣でフタをする。

昨年団体で立ち寄ったパームデザートの町やパームスプリング、広大なソールトンシーなどを眼下にしながら、広漠たる不毛地帯を飛び、出発後五十五分にしてデザートセンターの上空へ来た。そして高い岩山のふもとにあるコンタクト地点の上空を低空で二度旋回して帰途についた。アダムスキーが最初に望遠鏡をすえつけたという丘はス氏の指摘で明瞭に見えたが、ス氏が別な丘の上に立てた記念碑は確認できなかった。しかし川の流れの跡ははっきりと残っている。

旋回時に揺れたために塙君は気分が悪くなり、少し吐いた。私は何ともない。

やがて再度パロマー山の天文台が見え始め、続いてパロマーガーデンズが全貌を現わす。意外に敷地が広い。これは地上ではわからない。

ビスタへ着陸したのは三時二十五分だった。この空港には二百機もの小型機があり、四種類の飛行学校がある。そのために滑走路は狭くなってきたという。飛行免許は十八歳以上ならだれでも取れるし、年齢の制限はない。多くの人が自動車なみの趣味でやっているらしい。なにせ金持ちの高校生が夏休みに自家用機を操縦して遠くの我家へ帰省するような国だ。日本とはケタ違いである。

着陸後、グレン君と別れた三人は空港内のレストランで軽食を取った後、四時半頃にス氏の家へ帰ると、すでにグレン君は先に帰宅してケロリとした顔で海水パンツ一枚になり裏庭で日光浴をしていた。台所ではホワイティング氏が腕をふるって料理を作っている。彼は今夜の食事の当番らしい。

出来上がってから料理を裏庭へ運び、一同で屋外のディナーを始める。彼らは実に気楽にくつろぎ、気取った態度はみじんもない。服装もラフなもので、客と一緒だからというので着替えをすることもしない。厚いステーキを食べると腹一杯になり、どうしようもないが、残してはいけないと思って、むりやりに押し込む。明晩はス氏が故郷のドイツ料理を作ると言う。

楽しい食事が終わってから居間でくつろいでいると、ス氏夫妻が犬をつれて散歩に出かけるので一緒に行かないかと誘いかけたが、私は重要資料を読み続けたいので居残ることにして、塙君がついて出た。

二度目のウエルズ夫人への見舞

約一時間後に一同が帰宅して、今度はアリス・ウェルズ夫人の家へ見舞に行くので同行するかと尋ねる。行くことにして一緒に車で出かけた。

GAP本部たる夫人の家に着いて、アリス夫人の寝室へ一同で入ると、先日とは打って変わって苦しそうで、ベッドの端に腰かけているのが難儀なようだ。またも胸が熱くなって、私は正視に堪えられなくなってきた。

人生の大半をアダムスキーのために捧げて、いま八十年の生涯を終えようとしているこの高貴な婦人は、私に訣れを告げようとしているのか、「クボタ、質問はないか」と言う。尋ねたいことは山ほどあるけれども、到底、声は出ない。

万感胸に迫って、居ても立ってもいられなくなった私は一言だけ述べた。「八月にまた来ますから、そのとき会いましょう。お大事に」

「会えればいいけどね」

彼女は弱々しくつぶやいた。

先日、最初に見舞ったとき、元気そうな彼女は明瞭に述べた。――「私はアダムスキーを愛していました」

このさりげない言葉にショックを受けた私は、ある想いに全身の血が逆流したのであった。ここには宇宙的思想に関連した男女間の絆という問題があったのだろう。そしてこれも「陰陽」という宇宙の法則を基盤にしたものなのだろう。

私は居間へ引き返してマーサ・ウルリッチさんとしばらく語り合った。彼女は八十五歳という高齢ながら、おそろしく元気なばあさんで、大きな声で過去の思い出を機関銃のようにしゃべり続ける。この年になるまで病気をしたことはないという。

アダムスキーの夫人のメリーのことを尋ねてみたら、大変立派な奥さんで、料理がすごく上手だったと言う。マーサさんは生涯独身を通した。若い頃は幼稚園の先生として数千名の教え子を指導したというが、その教え子たちもかなりの年齢に達しているのだろう。彼女はアリス・ウェルズ夫人よりも早くアダムスキーの弟子になったから、最も長くア氏に仕えた婦人であり、彼女自身もそのことを誇りにしているらしい。夢多き多感な青春時代もあったのだろうが、もうすでに老境の域を通り越して、大悟しているようだ。

やがて一同は同家を辞して帰途についた。ス氏の家の居間で熱いお茶を飲みながら、イ夫人と少し語り合う。アリスをどう思うかとイ夫人が尋ねる。

「何とも言えませんね。東洋人は死期の近づいた人を非常に心配して感傷的になります。しかし転生の思想を持つ私たちは死を悲しんではいけないんですね」

私が答えるとイ夫人は微笑してうなずいた。このグループの人たちはアリスさんの死に対して非痛の念などはかけらも持たない。むしろ死の苦しみから脱却して転生し、新しい肉体を得ることを喜び祝うべきだと、しきりに力説する。普通人には全く理解しがたいことなので、一般人の前では言えない問題だ。

十時頃に私はス氏の家を辞して宿舎に帰った。

宇宙的な素晴らしい家族

二十日。朝十時にホワイティング氏とイ夫人が塙君を迎えに来て、車でどこかへ出かけて行ったので、私は十一時頃まで自室で原稿を書いたあと、身仕度をととのえて待機した。

十二時すぎにス氏が車で迎えに来る。なにせバスや流しのタクシーなどはない町なので、いちいち自家用車で送迎してもらう必要があるのだが、これを彼らは実にこまめにやってくれる。人間にとっ

●ステックリング氏の居間にて愉快なひととき。ス氏夫妻はウェルズ夫人を見舞に行った。（セルフタイマー）

て親切さほど高貴なものはないことを痛感した日々であった。

そのままス氏の家へ行き、居間で重要資料を読み続けた。というよりも読まされたと言うほうがよいだろう。ス氏も自室で休息しているらしい。裏庭へ出て私はただ一人で読みふけったが、暑いのでまた居間へ入り、しばらくして疲れたのでソファに仰向けになって寝ていると、やがて三人が帰って来て、急ににぎやかになった。

ホワイティング氏は実に愉快な人で、常に哄笑し、雰囲気を明るくする。この人と一緒にいると全く気苦労を感じない。その笑いも人なつこくて、たまらない魅力がある。彼はス氏の家の一室を借りて生活を共にしながら、ス氏のGAP活動に協力しているのである。

●ホワイティング氏

この宇宙的な素晴らしい家庭には、明朗さ、屈託のなさ、卒直さ等が満ちており、暗いカゲなどはみじんもない。親がヒステリックになって子供を怒鳴り散らすような光景は別世界の出来事のような気がする。

やがてハンソン夫人も見えた。ホ氏が東京で買って帰った日本の伝統的な音楽のレコードをテープに録音したものを日本製のアカイの機械で流すと、ハンソン夫人が感嘆の声を放つ。オーケストラと琴の演奏を主体にした日本の昔の小学唱歌集だ。その題を私がいちいち説明する。

この日、日本GAP会員の池田雅行氏が描いたアダムスキーとオーソンの砂漠におけるコンタクトの光景の見事な油絵がス氏宅に小包便で届いた。晴らしい細密描写に一同驚嘆し、ひとしきり池田さんが話題になった。

食事のあと、ふとしたきっかけから、日本GAPの話になり、日本の多数の会員から来たという英文の手紙類を箱に入れてイ夫人が持ち出した。ここでホ氏を加えてス氏、イ夫人、私の四人で真剣な討論が実に十二時まで続いたが、内容は第三者のプライベートな問題になるので触れないことにしよう。私の悪口を書いた次元の低い手紙もあったが、ビスタの本部の人々はこの発信人を全く相手にしていないとだけ述べておこう。

ホ氏が宿舎まで送ってくれて、明朝十時に私と彼の二人だけで朝食をとりながら重要な問題について語り合うことを約束して別れた。自室で深夜一時まで本稿のこの部分を書く。

世界GAPの再建計画

二十一日。ホワイティング氏が車で迎えに来たので、二人だけで付近のレストランへ朝食に行く。

食事中に重要な問題を語り合ったが、

彼によると、アリス・ウェルズ亡き後は世界GAPを再建し、約十カ国を統合して、各国に一人ずつのリーダーをおき、リーダーと本部間とで録音テープによりひんぱんに連絡や質疑応答を行う計画を持っているが、どう思うかと私の意見を求めるので、大賛成だと答えた。実はこれと同様のシステムを、かってアダムスキーが存命中に樹立しており、それをInternational Get-Acquainted Program (IGAP) と称して十数カ国にわたって活動を続けていたのだが、他界後は衰退したのである。それを盛り返そうというわけだ。ア氏の時代にはテレコが発達しなかったので手紙が主体であったけれども、今は録音テープにより短時間で豊富な情報が記録できるから、これはよいアイデアだ。

第三次大戦について尋ねてみたら、よくはわからぬが、来年あたりが危ないのではないかとホ氏は言い、戦争になっても核兵器を使用しない通常戦争程度ではあるまいかと話す。今秋アメリカの大統領選があるけれども、戦争好きのリーガンが大統領になればどうなるかわかったものではないとも言う。

その他の問題をあれこれと語り合い、十二時すぎにス氏の家へ着くと、ハンソン夫人とセルチャウ夫妻がすでに来ている。今日の午後はステックリング氏の誕生祝いのパーティーが開催されるのだ。しかも裏庭の一隅で戸外パーティーをやろうということらしい。

裏へ出ると、かなり暑い。この六月二十一日から〝カリフォルニア・サマー〟といわれる夏の季節が始まるのだとホ氏が説明する。私は誕生祝いとしてス氏に酒でも進呈しようと思い、そのことをホ氏に話したら、郊外に買物に出かけるから、ついでに買いに出かけたらどうかと言うので、三時頃車に同乗して出た。

一点の雲もない快晴下のフリーウェーをぶっ飛ばす。日本製の車がやたらと目立つ。ダットサン、トヨタが多く、オートバイではホンダ、カワサキ等が多い。カメラ店にある品は百パーセント日本製カメラで、電気器具、時計等もそうだし全くカリフォルニアは日本の一部ではないかと思われるほどに日本製品が氾濫している。

しかし「風吹けば桶屋が儲かる」式に推論すると、これはあまり誇張されたものではない。日本製品が多いのは優秀で安いからであるが、現代は各国間の商品の優劣にほとんど差はない。問題は価格である。とにかく日本製品は安いのだ。カメラがその好例である。この理由は日本人の生活レベルが低いから人件費が安くつき、生産コストも安くつく。したがって欧米でよく売れるのである。皮肉な表現かもしれぬが、日本人がウサギ小屋に住んでいるから日本製品が海外を席捲するのである。だがダットサンを愛用するステックリング氏は、日本の小型車はアメリカの小型車に比較して、やはり優秀だと言っていた。

買物をしてス氏の家に帰ると、三時頃から裏庭でパーティーが始まった。ステックリング氏が赤い花輪を首にかけてすわり、ローソクの火を吹き消してから、一同でケーキを食べ、山積みされた贈物をス氏が次々と開きながら、嬉しそうに謝辞を述べる。かなり金目の品ばかりのようだ。

これは美しい習慣である。東洋人は人間の誕生日よりも死んだ日を命日として記念する習慣が強いと私が話したら、ホ氏が、それはいけないことだ、断然、誕生日を祝うべきだと力説した。

彼が外部スピーカーでハワイの音楽を流す。彼によるとハワイは大昔のムー大陸の一部で、しかもハワイの田舎の熱帯植物の繁茂した光景は、金星の風景にそっくりなのだという。ホ氏は大昔、ムー大陸時代にハワイにいたので、ハワイに関心が強い。ときどき音楽に合わせて「イハー！」という奇声を発して、一人ではしゃいでいる。いつ見ても本当に陽気な人だ。

米西部ドライブ行

二十二日。今日から約一週間の予定で私たちはアリゾナ州の大隕石跡やグランドキャニオン、ネバダ州のラスベガス等を見学のために、ドライブ旅行に出発した。これは息抜きの行楽で、アダムスキー哲学研修とは直接関係がないから詳細は省略しよう。大要のみを記すと——

私たち（ステックリング氏夫妻とエリシアちゃん、それに我々二人の計五名）は、ハンソン夫人から借用したシボレーの車一台で、まずアリゾナ州の州境に近いプライスに向かったが、途中、同行の塙君のためにデザートセンターへ寄った。外はすごく暑くて、携行した温度計で計ってみると約四十度あった。

コンタクト地点のそばの小高い丘の上に登ると、昨夏来たときに立ててあった小さな記念碑（本誌第68号18頁を参照）は何者かに引き抜かれて、小石が積み重ねてあった。ス氏によると、悪質なグループかヒッピーがやったのだろうという。そういえば、付近に野営した跡があり、カンヅメのカス等が捨てられていた。

無表情で無言の塙君は感動しているのかいないのか、わからぬが、私にとっては何度来ても、たまらなくなつかしい場所であり、早く言えば世界の運命を決めた地点だとも言えるような気がして砂地

●デザートセンターのコンタクト地点にて

を凝視し、低回した。今夏八月にもまた来るのだからと我が身に言い聞かせてやがて立ち去った。

車はアリゾナ州へ入り、夕方プレスコットに着いて、ここで米GAP会員のノーマン・ストーン氏に紹介されて同氏の家へ行った。

ストーン氏は一風変わった人で、もとはジョージ・ワシントン大学法学部出の弁護士だったが、どういう事情か弁護士をやめて、いまはプレスコットで家庭用品の行商をやっている、独身を通した六十歳の人である。イ夫人の話によると、弁護士時代はすごく傲慢であったが、アダムスキーの哲学に触れて、本部の指導を受けるようになってから人が変わってしまったという。たしかに好人物で面白い人である。しかもこの人はジュリアス・シーザーの生まれ変わりなのだとス氏が言う。

私たちはプレスコットに一泊して、翌日私はストーン氏の愛車トヨタ・カローラの助手席に乗せてもらい、日米の言語や文化に関する話をしながらフラグスタッフ市に向かったがこれは全く愉快なドライブだった。インテリだから話す英語も正確で、わかりやすい。「日本の公衆浴場では男女が一緒に入浴するのだとアメリカ人はみな思っているが、それは本当か」と尋ねるので、「とんでもない、厚い壁で男女別に仕切られていて、隣をのぞくこともできない。もしのぞいたりすれば警察に逮捕される」と答えると、へへーと驚いている。私の英語の発音をどう思うかと尋ねると、「大変立派だがアクセントが全般に弱いので、各語のアクセントの位置をもう少し強く発音すればよいだろう」と忠告してくれた。このドライブ中に私は日本語の「アリガトウゴザイマス」と言う言葉やその他の単語を氏に教えた。かなりいい線までいったのだが、別れる頃に氏はきれいに忘れていた。「何度復誦しても、どうしても覚えられない。日本語は信じられぬほどむつかしい」とぼやいていた。ちなみに氏はスペイン語が達者である。

雄大なグランドキャニオンへ

この夜はフラグスタッフ市に泊り、翌二十四日にまたストーン氏の車に同乗して、昼頃フラグスタッフの東方六十四キロの大隕石落下地点へ着き、博物館と、直径千二百メートルもある巨大なクレーターを見学後、再度フラグスタッフへ逆もどりして、夕方五時頃に名高いグランドキャニオンの南側リムへ到着した。実物を見ないことには写真だけではピンとこない点、エジプトのピラミッドと同じだ。壮大きわまりない光景が灼熱の夕陽をあびて展開する（4頁のタイトルのパック写真もその一部）。

翌二十五日に再度グランドキャニオンへ行き、ゆっくりと見学後、ストーン氏の車に乗って、午後遅くフラグスタッフ市へ帰ったが、このドライブ中、またもストーン氏と楽しく語り合った。氏のお父さんがむかしワシントン市で小さな食料品店を経営して、お客さんはほとんど黒人だったために、黒人の何たるかはよく知っているが、彼らは実に善良で、いい人たちだったと言う。そしてイングリッド夫人の話として、「世界のあらゆる人種のなかで、黒人が最も正直な種族なのだ」とストーン氏が語るので私は大いに感動し、以来、黒人を見る眼が変わってきたのだが、後日、イ夫人にこのことを確かめてみたら、黒人の八十パーセントが最も正直なのだと言っていた。また「日本人はむかしアメリカではジャップといってバカにされていたけれども、現在は日本製の優秀な安い車やその他の製品がアメリカ中に満ち溢れている。我々金のないものは日本製品を使用しなければやってゆけない。いまは日本人さまさまだ。人種差別などもってのほかだ」とストーン氏は力説する。

大学の話になって「トーキョー大学を知っているか」と尋ねたら、「名前だけは聞いたことがある」と言う。「キョート大学はどうだ？」「知らん」「ワセダ、ケイオーはどうか？」「全然知らん」

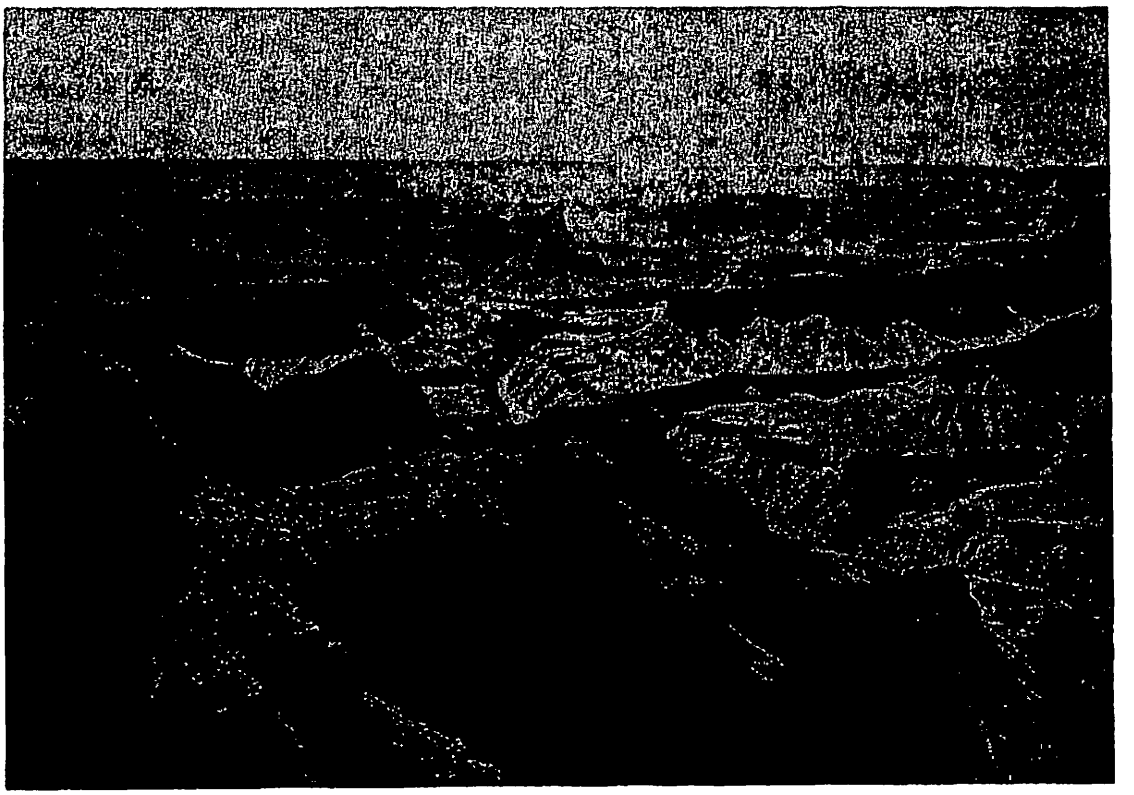
インテリのストーン氏にしてこの有様だ。どだい、日本の有名大学というのは小さな日本国内で有名なだけで、世界に通用しないのだ。アメリカへ行って日本の一流大学を出たと称しても、だれも鼻もひっかけない。日本人は学歴で何というバカ騒ぎをやっているのだろう！

グランドキャニオンのレストランで夕食をとっているときに、「日本人は深味はあるけれども、正直ではない」とイングリッド夫人が言ったのにはこたえた。狡猾で、しかも明るさがないということらしい。

●グランドキャニオンにて。右から2人目がストーン氏。

素晴らしいカリフォルニア

いったいに、アメリカ人は率直で、明るくて、マナーが良い。多くのレストランに入ったが、ウェートレスの愛想の良さと親切な点、日本のウェートレスのつっけんどんな態度とは雲泥の相違がある。ホワイティング氏によると、アメリカの五十州の中でも、カリフォルニア州が最高に良いという。人間がおおらかで、小事にこだわらず、明るく親切で、イージーで、格式ばらない。だからアダムスキーもカリフォルニアに住んだのだ。これは温暖な気候のせいかもしれない。カ州の夏はかなり暑いから、人々はスーツ、ネクタイなどを全く着用せず、



●グランドキャニオンの大景観。中央にコロラド川が見える。（筆者撮影／ニコンFE／ニッコール135 mm f 3.5／オート／コダクローム64）

開襟シャツ一枚ですごす。スーツにタイを着用するのは葬式のときだけだとホ氏がしきりに言っていた。しかし同じアメリカでも他州、特に東部へ行くほど人間の心が狭くなり、他人の悪口を言ったり怒ったりするという。

いろいろ聞いているうちに私もカリフォルニアへ移住したい気持にかられたが、現在、日本人の移住は大変な難事だから、おいそれとはゆかない。むつかしい問題なのだ。

ラスベガスで大休止

二十六日は昼すぎにストーン氏と別れを告げて、ステックリング氏の車でネバダ州のラスベガスに向かい、果てしもないモハービ大砂漠をつっ走って、五時頃に同市へ到着した。ご承知のギャンブルの町だが、白昼は何の変哲もない砂漠のど真ん中の都市にすぎないけれども、夜はネオンが美しく輝く幻想の歓楽郷に変貌する。ここのスターダストというモーテルに三泊したけれどもギャンブルに関心のない私には当初、異常なまでに低劣な雰囲気というか波動を感じて頭痛がしそうだったが、環境から受ける影響は恐ろしいもので、次第に慣れてきた。

ラスベガスのギャンブルで主体をなすのは「ワン・アーム・バンディット（片腕の山賊）」と呼ばれる機械で、コインを入れて右側のレバーを引き、一定の符号が並ぶと賞金のコインがじゃらじゃらと出てくる。日本のパチンコみたいなもので、これが各ホテルに数百台ある。他にもルーレットやカード等の本格的なのもある。

ここに滞在中、リド・ド・パリのショーや有名なピアニストのリベラッチのショーに案内されたり、久方ぶりにプールで泳いだりして楽しくすごしたが、その間にフーバーダムにも見学に行き、一九三〇年代に建造されたすごいダムと巨大な発電所に感歎したあと、二十九日の夕方七時にビスタへ帰着し、同夜は十一時まで原稿を書いた。

フーバーダムから帰る途中、ス氏が第二次大戦のナチスドイツの終戦秘話ともいうべき、すごく興味深い話をしてくれた。一般に知られている歴史の五十パーセントはでたらめだと言う。大衆は全く知らないのだ。

深遠な人間の転生

三十日は朝七時半に起床して大洗濯をやり、午後一時にホ氏の迎えの車で出て途中、驚くほど安い果物を市場で買い、これをステックリング氏の家へ持って行く。私は午後中ずっと重要資料を読み続けた。

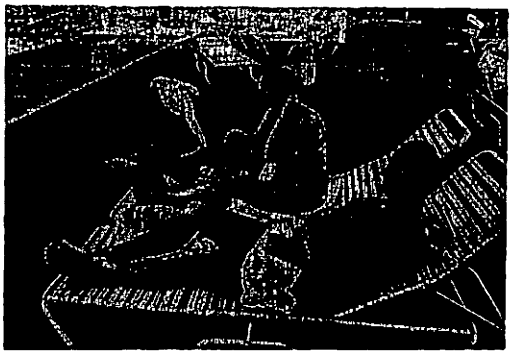
夕方六時にス氏宅で夕食をご馳走になり、ホ氏とウィスキーの水割等で一杯やって十一時にモーテルに帰った。

七月一日は、昼間原稿を書きながら待っているとホ氏が一時半に迎えに来たので、薄茶のスーツにネクタイをしめて出る。今日は、夕方一同でサンディエゴのポリネシア料理店へディナーに行こうと計画していた日である。私のスーツ姿を

見たホ氏がうんざりしたような顔をして、「タイをはずしなさい。ここはカリフォルニアだぜ！」とがなりたてる。

いったんス氏の家に行き、居間で重要資料を読んでいると、外出から帰ったイ夫人が、「日本で百カ所にわたって大地震があり、人々は食料を求めてパニックにおちいっている」というニュースを聞いたと言う。えっ！というわけでテレビをつけてニュースを出しても一向に放送しない。夕方、出かけにホ氏に尋ねると、「心配しなさんな、小さな地震だ。あの程度の地震はカリフォルニアでは毎日でもあるよ」と言う。

七時すぎに仕事で参加できぬス氏を除いて、イ夫人、ホ氏、エリシアちゃん、ハンソン夫人、それに我々二人の計六名で車に乗り込み、約四十五分後にサンディエゴのバリ・ハイというレストランへ行き、楽しく食事をし、ハワイのフラダンスの実演などを見て、帰ったのは一時すぎだった。車中、イ夫人から聞いたのだが、カリフォルニアでもビスタは地震の恐れのない最も安全な場所だから、それでアダムスキーがここに居を構えたのだという。



●ラスベガスのプールサイドにてス氏一家。

七月五日は午後一時半にホ氏が迎えに来てくれて、ただちにス氏の家に行き、重要資料に眼を通す。イ夫人が語るには主人のフレッドは約二百年前、アメリカのある偉大な政治家であったという。あなたはその頃どこにいたかと尋ねると、彼女は当時地球におらず、別の惑星で約一千年をすごして、一九三七年に地球のベルリンへ直接に転生してきたのだという。私は（久保田は）今生を終えたら金星へ行き、そこで高度な探求を終えたあと、ふたたび地球に転生して来て、地球人のために活動をするようになるだろうと言った。

こうした転生の話はうんと聞かされたが、そのすべてを完全に記録することは不可能だったので、忘れた部分もかなりあるけれども、なにかの拍子に思い出すかも知れない。

四時すぎにデルマーという町で開催されているフェアー（農産物を展示した市）を見物に行った。広い敷地内に各種の産物や製品が並べられ、即売もやっており遊園設備、食堂等もある。日本の市と大差はないが、違うのは、こちらには会場入口に大きな横断幕や掲示等が一切なく事情を知らぬ人が来たら何のことやらわからぬこと、会場のどこへ行ってもわりと静かなこと、などである。小学校が三カ月の暑中休暇中なので（三カ月も休むのだ！）子供づれの家族が多い。少々田舎くさい市だが、これはカリフォルニア州内で最大の市の一つだという。

夕方八時にス氏の家に帰って、また重要資料を読み続けたあと、十一時にホ氏の車でモーテルに帰った。

ディズニーランドに感歎！

三日。今日はディズニーランドへ案内される日である。当初私は単なる子供の遊園地の巨大なものだろうぐらいに考えて、ほとんど関心はなかったけれども、あれこれ説明を聞いているうちに、この施設がどうやら宇宙人問題と関連のあることがわかってきた。

十一時にホワイティング氏が自分の車ランドーで迎えに来た。これに私たち二人とイングリッド夫人、エリシアちゃん、シェーン・セルチャウ氏と奥さんの康子さんの計七名が乗り込んだ。

アメリカでは車に何人つめ込もうと差し支えはない。運転中に飲み屋へ寄って一杯ひっかけて、また運転しても違反にはならない。車がなくては夜も日も明けぬ広大な国だから、運転者にうるさく言っていたのでは、生活に支障をきたすだろう。交通取締の警官などはほとんど見かけなかったし、どこへ行っても警官らしい人がさっぱり姿を現わさないのだ。しかし大洪水のごとき自動車の流れは実に整然と展開し、運転者のマナーも立派である。国中の到るところに警官がいて睨みをきかし、駅のホームでは駅員が絶えずスピーカーでがなりたてなくては統制のとれない日本が厳しいのか幼稚なのか私にはわからぬが、少なくともアメリカがはるかに大人の国だという印象を受けたことは否定できない。

約一時間後、アナハイムのディズニーランドに到着して早速入ってみるのに大変な人で案内図もないから、初めは何が何だか見当がつかなかったが、次第に様子がのみ込めてきた。ここは筆舌に尽くしがたいほどの巨大な夢のランドである。あらゆる遊戯施設が完備し、立派な商店街や各種の食堂まであって、大人でも結構楽しめる。もちろん子供づれの家族が多いが、老夫婦の行楽もかなり目立つ。日本人は主として八月に海外へ出かけるので、同胞は全く見当たらず、すべて白人ばかりである。

特に印象に残ったのは「スペース・マウンティン」という施設で、当初、ホワイティング氏は、ロケットで宇宙空間を飛ぶような気持がするんだとしか説明しなかったために、ロケットのシミュレーターのごとき物かと思っていたところ、長蛇の列に加わって進行するうちに「心臓の弱い方はご遠慮下さい」という英文の掲示板があるのが眼についた。奥では何やらジェットコースターらしい音響がする。私はこれに乗るのが大嫌いなのでしまったと思ったが、あとの祭りで、いやでも乗らざるを得ないはめにおちいった。

しかもこのコースターは真っ暗闇の空

間を走るので、よけいに気味が悪い。大ドーム内の天井には星々が輝くように見せかけてある。走行中、生きた気がせず I wouldn't be caught dead on one again! (もう死んでも二度と乗らないぞ!)と大声を出すと、そばのホ氏が爆笑しながら、One more! (〈危険な個所が〉もう一度あるぞ!) と、からかう。

ほうほうの体で出たあと、私の苦り切った顔を指さしながら、ホ氏がしきりに大声で笑う。おかしくて仕様がないという風情だ。

最初、彼はここの入口の壁面に二メートル四方程度の色光グラフみたいなものがあるのを示しながら、「あれはアダムスキーが円盤の内部で見た色光グラフと、そっくりなのだ」と言っていた。各種の色が変化しながら、奇妙なグラフになって次々と現われては消えてゆく。

スペース・ブラザーズが設計

大いに感動したのは「イナー・スペース」という会場へ入ったときだった。二人乗りの乗り物で巨大なドームや湾曲した壁面などの中を通過するのだが、周囲には無数の不思議な光が輝く。スピーカーの説明によると、これは物体を形成する分子群で、我々はいまその中へ入ってしまったのだという。ある部分には大きな顕微鏡があり、アイピースの部分からでかい人間の眼がのぞいている。つまり我々は顕微鏡でのぞかれたミクロの世界の中にいるわけだ。

このアイデアと技術は素晴らしいもので、感歎のほかない。ホ氏によると、この「イナー・スペース」の会場は、スペース・ブラザーズが設計を担当しておりオープンの日には二人のブラザーズが入口に立っていて、お客さんにチラシを渡していたという。またアダムスキーも生前はディズニーランドを愛して、たびたび訪れては小供のように喜んでいたということだった。

さもありなん、子供に無限の美しい夢を与えた偉大なメルヒェン創作者ウォルト・ディズニーという人は、ある惑星から地球へ転生してきたのである。しかも彼は出身惑星の記憶をよく保っていた。だから、このランドは宇宙的な雰囲気に満ちているのだ。

他にもピンポン台ほどの大きさの台の表面を径五〜六センチの円板をすべらせて相手の穴の中にすべり込ませる二人用の競技台もいくつかあったが、これもア氏が描写した宇宙船の内部で行われる競技に酷似しているとのことだった。ただし彼らのは電磁気的なもので、円板が浮き上がって移動するらしい。

豪華な光の大パレード

圧巻は毎夜八時すぎから始まる光の大パレードである。各種の動物をかたどった大きな模型や、美女の乗った山車などが出るのだが、いずれのボディーも数千個の美しい色光で輝き、その絢爛豪華なること譬えようもない。これらが音楽とともに延々と大行列をなして繰り出す。子供も大人も拍手と大歓声をもって迎える。まさにここは、この世最高の幼き者の夢の国であり、純粋さと歓喜の織りなす一大幻想の世界だ。私も感動で全身の血が沸き返り、カメラを持つ手もしばしば震えるのであった。

興奮さめやらぬまま一同と共にビスタへ帰ったのは深更一時半頃だった。ディズニーランドは昼すぎの十二時半から始まり、夜の十二時に終了する。見学には三日ほどを要すると聞いていたが、手際よくまわれば一日で充分である。読者も渡米の際はぜひここへ立ち寄られたい。なお、現在フロリダ州に、ディズニーランドの二倍の規模を持つ「ディズニーワールド」が開館されているとのことである。

宇宙的な生き方とは

四日。ランド見学の疲労で、眼覚めたのは十時半だった。近くのレストランで昼食をとった後、いったんモーテルへ帰って手紙や原稿を書く。

三時すぎにホ氏が迎えに来たので、スティックリング氏の家へ行く。今日はアメリカ独立記念日なので商店は閉鎖している。特別な予定はなく、私は手持ちぶさたになるだろうからス氏の家の居間で原稿を書いたらどうかとホ氏が言うので、原稿用紙と国語辞典を持参し、グレン君とディズニーランドのことを少し話しあい、「日本中の子供に見せてやりたい」と語った後、原稿を書き続けた。ときどきホ氏が私の日本語の原稿をのぞき込んで、「やあ、立派な文章だ」と冗談を言いながらケラケラと笑う。全くこの人は愉快な人物でカリフォルニアの夏空を思わせるカラッとした性格だ。こういう性格の人物になりたいと思うが、日本のじめじめした陰湿な環境下に住んでいることが問題だし、人間の性格は簡単には改善できないからまず無理だろう。

しかし因襲や伝統や格式ばった風習などを打破して、自由に伸びやかに生きることが宇宙的な生き方の第一歩だと、ビスタの本部の方々は口をそろえて強調していた。またディズニーランドの一隅でロックの演奏と踊りに熱狂したホ氏は、バランスのとれた人間になることをすすめて、「あんたも日本へ帰ったらGAPの若い人たちをつれて、たまにはディスコへでも行ったらどうか」と言う。だから五月には河口湖バスツアーを実施し、夜はホテルのバーでひと騒ぎやったのだが——。

要するに宇宙哲学の研究実践は絶対に抹香くさい宗教的な雰囲気を醸し出すことではなく、あくまでも常識と分別とを基礎にした愉しい人生の確立を目指すことにあるのだ。人間は人生をエンジョイする権利を持っているのだから、一杯飲もうと歌おうと踊ろうと一向に差し支えはない。ただそのためのケジメをつければよいのである。そして場所と時とをわきまえて相応に振舞えばよいのだ。

さて、私は居間で原稿のこのくだりを書いている。そばではエリシアちゃんがテレビを見ている。

八時から夕食が始まった。サラダ、ソーセージ、ジャガイモ、赤キャベツ等が

出る。ソーセージがうまい。これは典型的なドイツ料理だとイングリッド夫人が説明する。

夕食後しばらく雑談し、私は居間に引き返して原稿を書き続ける。食卓では訪ねて来た康子さんが通訳して塙君とイ夫人らの会話を助けている。エリシアちゃんが奥の自室で小猫を相手に騒いでいる。彼女は小学校の五年生で、天使のように可愛い少女だ。

再度言うとステックリング氏の家庭はあまりにも自由で伸びやかで明るくて解放的である。ここにいると心身ともにリラックスして、あらゆる煩悩は吹き飛んでしまう。カリフォルニアのすべての家庭がこうまで宇宙的でもあるまいが、経済事情は不明であるにしても、広い芝生の庭つきの家に住むアメリカの人々の明朗さからみれば、喧噪と汚濁に満ちた東京へ帰るのがつくづく嫌になり、またもこのままアメリカに住みつきたいと思うのだった。

●左よりグレン君，エリシアちゃん，ホ氏。

重要なチャーチワードの理論

ホ氏がそばへ来て二冊の英文の書物を見せてくれる。チャーチワードの最後の力作「ムーの宇宙力」と題する二巻から成る本で、彼はムー大陸に関する古文書を解読して、地球の地殻内を走るガスベルトの存在説を唱えており、その詳細な地図まで載せてある。日本の部分も地図入りで詳述してあるが、カリフォルニアからアラスカに伸びる数本のガスベルトが日本列島に達する地点で交叉しており、このために、いつか日本列島は大地震により海底に沈下するだろうとホ氏が説明する。物騒な話だ。ただしその時期は不明だという。この書物の日本語訳が出ているかどうかは知らないが、もし出ていれば入手したいものだ。ちなみにチャーチワードのムー大陸に関する学説の大部分は真実なのだと語る。

私が書いているこの記事の手書き原稿を見て「日本文字というのは、まるで鳥の足跡が連続したように見える」と言う。彼の眼には楔形文字に似た、おそろしく難解な文字のごとく映るらしい。

言語の問題を語り合っているうちに、ホ氏は最近、新しい建設会社を設立したと話しだした。造園、庭園用スプリンクラーの設置、塀、生け垣等、要するに家屋の周囲に必要な設備の建設請負業である。社名は Arrow Landscaping Co. というがまだ事務所はない。社員は仕事の都度駆り集めるという。休暇を自由に取る必要があるので、彼は自営業から離れられないのだ。宇宙的な活動をするリーダーたる者は人に使われていてはだめだと、来日した折にも力説していた。カリフォルニア州では日本庭園が大いに好まれるので、日本庭園の写真集なり参考文献がほしいと言うから、帰国後に送ることを約束した。

素敵な贈り物

この日一つの嬉しい贈り物があった。エリシアちゃんが、お母さんの言いつけにより、ある素晴らしい英文をエンピツで紙片に書いて私にくれたのである。それは「愛」と題する短文で、翻訳すると次のとおりになる。

愛とは忍耐強く親切にすることです。
愛とは嫉んだり思い上がったりしないことです。
愛とは自慢したり利己的になったりしないことです。
愛とは不作法にならないことです。
愛とは、いらいらしないことです。
愛とは恨みをいだかないことです。
愛とは悪をよろこばないことです。
愛とは真理をよろこぶことです。
愛とはあきらめないことです。
この信念と希望と忍耐があれば、決して挫折することはありません。

新約のコリント書からとった、これらの真理の言葉は私の耳に痛く響き、腹の底までこたえて、しばらくは顔を上げることもできなかった。天空の彼方から天使たちの大合唱が響いてくるような気がする——。

五日。帰国の日がせまった。今日は一般会員向けの質疑応答の日である。私は九時に起床して入浴後、原稿を書き、質問表の整理をし、テープレコーダーを準備して、ホ氏を待った。例によって朝方は雨の降りそうな曇り空だが、十時頃から快晴となる。

一時半にホ氏が車で迎えに来た。まずス氏の家へ行き、しばらくホ氏と宇宙問題に関する質疑応答を行い、テープに録音していたけれども、やがてス氏が居間に現われて、明日自分が休みなので質疑応答は明日自分を加えてやるほうがよいと言いだしたために中止した。ここではス氏が主体であるらしい。

四時頃、ホ氏の車にイングリッド夫人とエリシアちゃん、それに私たち二人が加わってビスタ郊外の大ショッピングセンターへ買物に行ったが、旅行者用小切手では買えないことがわかって、あきらめたあと、車を飛ばしてサンディエゴに向かう。これから同市の北方にある世界最大の野外動物園に行くのだ。

大自然の生命の躍動

園内に入り、しばらく鳥類を見たあと観覧用のモノレール電車に乗って周遊に出る。いやもう広いのなんの、自然の地

形を生かして各種の動物が広漠たる大平原の中に放ち飼いにしてあるのでアフリカの奥地に入り込んだような錯覚が起こる。カメラは望遠とワイドの二台が絶対に必要だ。電車は約五十分間周囲をゆっくりと走り、ときには停車するが、その間、スピーカーから絶えず女性の説明の声が流れる。鼻がつまったような声の、べらんめえ口調で、ホ氏に尋ねると、これが典型的なアメリカ英語だということだった。これをずっとテープに録音する。

素晴らしい自然界の生命の躍動を満喫したあと、園内の特設ステージで行われている音楽の演奏を聴きながら夕食をとる。

この音楽というのはジャマイカから来た黒人五人組によるスティール・ドラム音楽といわれる珍しいもので、手作りの金属製の大きなドラムをさかさにして、その底を叩いて音を出す。底には異なる大きさの小円型の盛り上がった部分が沢山あり、演奏者が両手に持つバチでそれを叩けば各種の音が出て旋律を奏でることができるのである。金属的な響きながら信じられぬほどの美しい音が出る。音域は一個のドラムでせいぜい二オクターブ程度らしいが、数個で演奏するからピアノの重奏のように華やかな優雅なハーモニーが流れ出る。ホ氏はこの音楽が熱狂的に好きだと言っていたが、私も陶酔してしまった。曲はきわめてリズミカルなカリプソものばかりだ。聴いていると踊りたくなってくる。これもテープにたっぷり録音した。

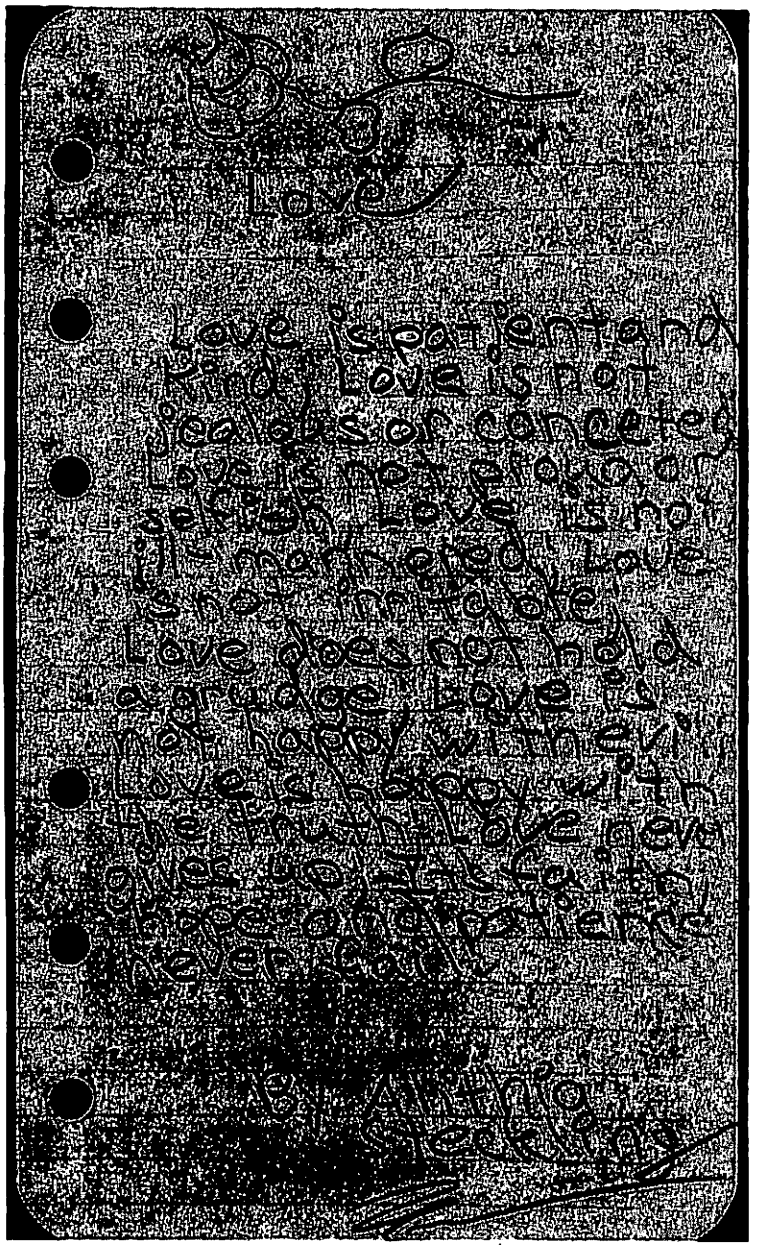
この演奏は夜の十一時前に終了したので、残念がるホ氏と共に車でビスタへ帰った。

六日。昨夜の演奏時に外気温度が低下して寒かったのを無理して聴いていたためか、早朝眼覚めたけれどもセキが出て気分が悪い。ミノマイシンを飲んで、またベッドに入り、起きたのは十時すぎ。洗濯したあと、十二時にレストランへ昼食に行き、いったん宿舎へ引き返したが今日は何やらお別れパーティーをス氏が開きそうな気配を昨日感じたと塙君に話し、スーツにネクタイで行こうときめて、身仕度をし、一時半に来たホ氏の車でス氏の家へ行く。

居間に落ち着いてまもなくホ氏とス氏の二人を回答者にして、一時間余、質疑応答を続けて、これを録音する。昨日の続きだが、ただしこの質疑は一般会員向けのものである。ス氏が私の質問に対して真剣な態度で滔々と答える。

質疑が終了したあと、ス氏がNASAから入手したというアポロ宇宙船撮影の月面写真を沢山持ち出して、不思議な物体が写っているのを次々と指摘する。そして複写してよいというのでコピースタンドを使用して複写する。

ス氏が台所でディナーの準備を始めたので、私は原稿用紙を持ち出して、今日の部分を書き始めた（ここまで書いたと



●エリシアちゃんの筆跡

き、時刻は五時十分だった)。そのあとソファで横になって寝る。美しい夢を見た。六時に起き上がってみると少しは気分がよい。だが冷房がききすぎて寒くなったのでカバンの中に用意したチョッキとモモヒキを出して着用する。私は気温の変化に対して敏感すぎるほどの異常体質なので、常にこんな物を持ち歩く必要があるのだ。

七時前に、これからディナーパーティーをやるので、康子さんのアパートへ行こうと言う。車二台に分乗して行ってみると、セルチャウ氏の部屋ではなくて、アパートの団地の中に共用の応接間があり、そこへ料理を運んで開催する計画だったことが判明した。

行ってみると約四十帖ばかりの広い立派な部屋には各種のソファー、テーブル椅子などが設置してあり、大勢の来客があると、住人はこの部屋を自由に使用できるのである。

七面鳥の肉、サラダ、その他の料理が大皿に盛られ、それを各自で皿に取り、あちこちのソファーや椅子にすわって食べる。儀式ばった挨拶などは一切やらず乾杯もなく、驚くほど無造作に食事を始める。私は日本式に考えて、一席訣れの挨拶をやらねばなるまいと英語のスピーチを準備していたのだが、拍子抜けしてしまった。だがこれがアメリカ式なのだろう。音楽の伴奏などもやらないので、きわめて静かだ。私はテレコを出して、ジャマイカのドラム音楽のテープを鳴らした。

そのうち、あちこち談論風発、次第ににぎやかになってきた。そして食事が終わったあとで、ウィスキーの水割りが出た。日本とは逆だ。私はまだ気分が悪いので、あまりしゃべらず、隅でジッとしていた。塙君は康子さんを通訳にしてイ夫人からしきりに指導を受けていた。

十二時近くまでいてから宿舎に帰り、睡眠薬を多量に飲んで熟睡した。

●7月6日，ステックリング氏，ホワイティング氏と共に質疑応答を行う。（この全訳は次号から連載の予定）

さらばカリフォルニア！

七日。いよいよ最後の日だ。熟睡したせいか十時に起床すると気分爽快だ。睡眠の重要さを痛感する。

一時半にホ氏が迎えに来たので、ステックリング氏の家に行く。するとス氏が出て来て「これから仕事に行かねばならないので、これがお別れだ。よい旅を。また八月に会おう」と言って、出て行った。私もあっさりと別れた。

私は居間で原稿を書き続ける。裏庭では康子さんを通訳にして塙君がイ夫人より最後の説教を受けている。この頃、同君は大きく変化した。これは彼にも実りある旅だったことだろう。

ホ氏がやって来て私が原稿を書くのを見ながら「まるで旧約聖書を書くように沢山書くんだね。いまやっと創世記の部分が終わったところだろう」と冗談をとばして大声で笑う。

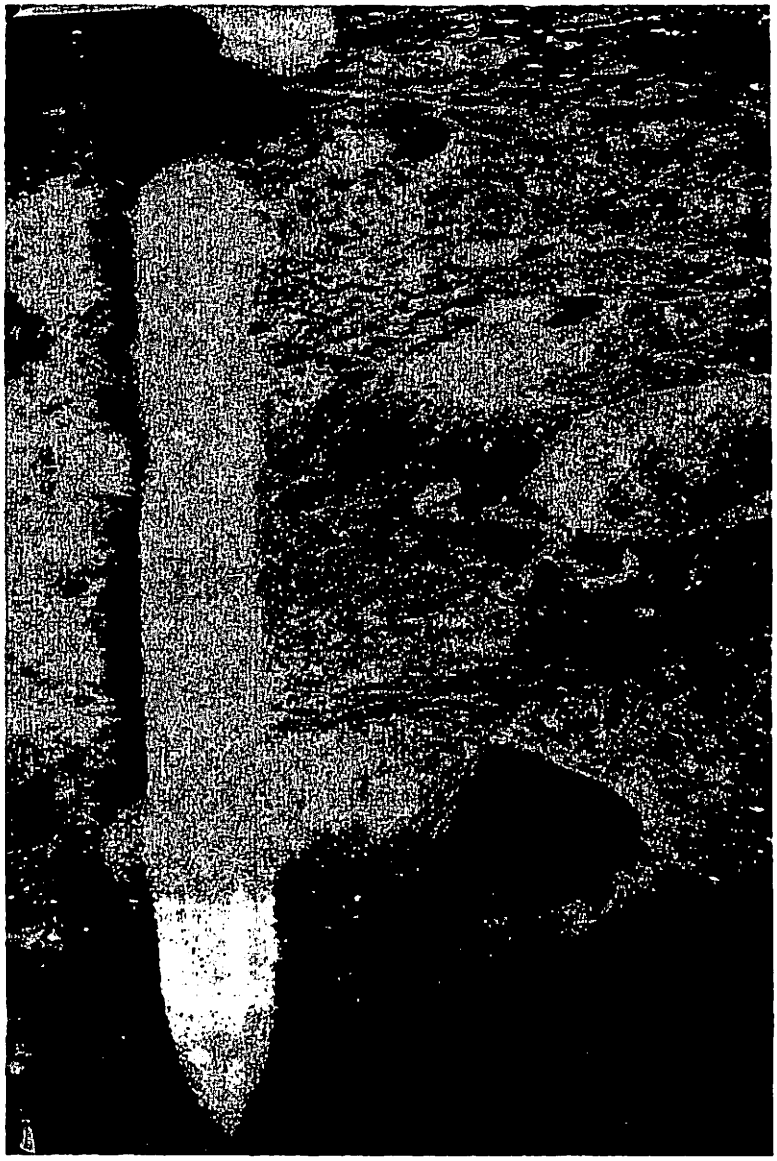
六時半に我々二人を車に乗せたホ氏がアリス・ウェルズ夫人の家へ最後の別れの挨拶につれて行ってくれた。ウェルズ夫人はかなり衰弱しており、もはやベッドから体を起こすことができず、寝たま

まで苦しそうに、しかしかすかな微笑を浮かべて迎えてくれた。言葉もはっきりしないので、耳許に口を寄せたホ氏が明瞭な言葉に言い直してくれる。ビスタに滞在して楽しかったかと尋ねるので、もちろん非常に楽しかった、来月また来るから、それまで元気でいて下さいとだけ言ったら、彼女はか細い手を伸ばして握手を求めたので、私もしっかりと握り返した。おそらくこれが最後だろうが、二度目に見舞いに来たときほどの非痛な感情はなぜかわき起こらず、近づいた転生の良き行先を願うだけだった。

マーサさんはしごく元気で、大きな声で話しかける。八月にまた六十名の日本人と一緒に来るから、そのとき会いましょうと言って、別れた。

そのあとス氏の家に引き返して、この家でディナーがあるのかと思っていたら、どうも様子がおかしい。イ夫人はきちんとした服装に着換えるし、エリシアちゃんも夜会服を着ている。どこかへ出かけるのかと思っていたら、ホ氏が、まずショッピングセンターへ行こうというので、ハンソン夫人を誘って六人でビスタ郊外の大ショッピングセンターへ行き、そこで若干の買物をすませたあと、更にオーシャンサイドのヨットハーバーへ着いて、海に面したチャートハウスというレストランで最後の晩餐と相成った。港の灯が見える美しい夜景を眺めながら久方ぶりにカントン料理を賞味し、ラム酒に他の飲料を混ぜた、すごく美味なカクテルに陶然となり、心ゆくまで語り合った。この店はポリネシア料理と中華料理の専門店で、ホ氏のお気に入りの店である。再三ここを訪れたくなるほどに素敵なレストランであった。

翌八日は早朝五時四十五分にホ氏が迎えに来た。他の方々にはすでに挨拶がすませてあるので、三人だけでロサンジェルス空港まで二時間で飛ばして、八月の再会を約したあと、私たちはついに別れた。

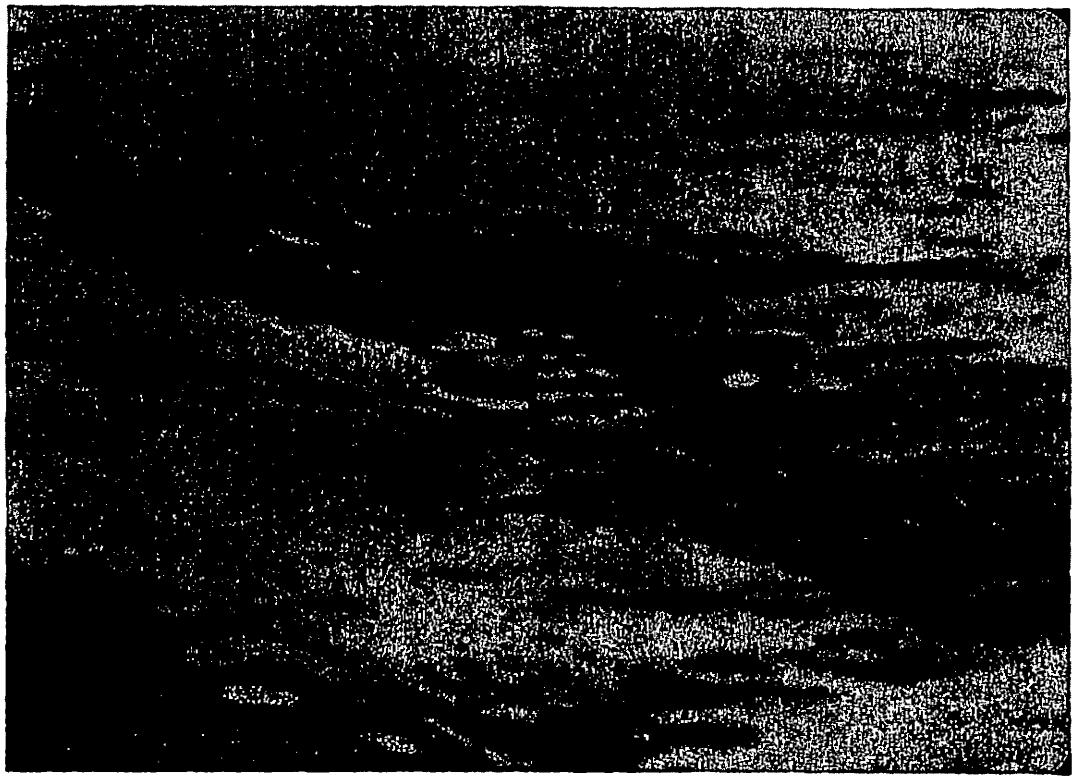


●アポロ飛行士が撮影した月面上の大母船。（F.ステックリング氏提供）

付記1

わずか一カ月足らずの小旅行だったが全く素晴らしい日々だった。異国の風物に接したことよりも、カリフォルニアの人々の明るさ、親切さ等が強烈な印象として残った。もちろんアメリカGAP本部の人々のご厚意には感謝の言葉を知らぬほどである。そして他人に対する親切な行為の実践こそ最重要であることを更めて痛感したのであった。「あらゆる言葉が語られ、行為が行われた後にも、なお言葉が残る」といわれるほどに人間は語りすぎるのである。他人に説教をする容易さと実行の困難さは言を俟たぬけれども、これを解決することが先決問題だろう。

明確になったのは、「生命の科学」「テレパシー」等を主体にしたアダムスキー哲学に対する私の解釈は全く間違っていなかったということである。浅学をかえ



●月面上の不思議な物体。中央に10個の階段状建造物がある（F.ステックリング氏提供）。

りみずに過去二十年以上にわたってア氏問題の普及促進に奮闘してきたが、これは軌道をはずれてはいなかった。だから米GAP本部より招待を受けたのである。このささやかな活動が万人に認められないにしても、それなりの意義はあったと思う。

本部の人達が強調したのは「アダムスキー問題に関心があろうがあるまいが、だれに対しても親切を尽くせ。それがリーダーの義務だ」ということである。これも難題だが、何とかしなくてはなるまい。「みんな、あたしが悪いのよ」というがごとき日本的なナヨナヨした罪の観念を私は極端に嫌う人間だが、義務感を高める必要はあろう。

それにしても非難攻撃を絶やさぬ反アダムスキー派や、悪質な言動をなすGAP離脱者までも愛さなくてはならないのか？

ノウ！だ。突っかかって来る者は避けるだけの話である。ビスタの本部の人達もそうしているようだ。つまりケンカの相手にならないで、かわすのだ。そのためにはまず敏感になる必要がある。

我々は愚鈍なお人好しであってはならない。お人好しは真の愛ではない。テレパシックな力を増強して、あらゆる状況を敏感に察知し、善処することが大切である。

また夢想家に堕してもならぬ。大地に足をしっかりとつけて、現実を直視しながら、まず働くことだ。ビスタの本部の人達も生活のためにばりばり働いており、収入を得て生計を立てる一方でGAP活動を展開しているのである。これは大変な事だろうが、この人達の義務感と信念は常人のそれをはるかに超えているので、見たところ苦しそうではない。そして決して愚痴をこぼさぬのである。これも私にはこよなきレッスンになった。

ビスタに滞在中、私はぼう大な情報を与えられ、写真類を見せられたが、残念ながらその大部分は時機到来まで公開はできない。同行者にも洩らしてはいない。「そのような思わせぶりな表現をするのなら最初から言及しなくてもよいではないか」と言う人があるかもしれないが、単なる物見遊山の旅で渡米したのでないことを明確にするために付言したまでである。

しかしアダムスキー問題が測り知れぬ深遠な問題を含んでおり、楽園（パラダイス）へ近づく道を示す一方、これに関連して奇怪な反対活動が展開していることも知った。だが私たちは恐怖してはならぬ。恐怖心は恐怖すべき物を引き寄せる引き金となるのだ。強力な武器はやはりテレパシックな敏感さと宇宙の意識を主体にした生き方であろう。

日本GAPの会員の方々で少なからぬ人がアメリカGAP宛に手紙を出すらしい。これは結構な事だが、絶対に第三者の悪口を書かないことである。ス氏やホ氏はそのような人を支持しない。また、この記事を読んで「久保田はビスタで重要な資料や写真を見たらしいが、その内容は何だったのか？」という常識はずれな質問状を出す人は日本GAP内にいないことを確信する。もちろん、そんな質

問に対して回答が来る筈はない。アメリカの本部へ手紙を出すのなら、返事を必要としない、メ氏やホ氏の健闘を祈える手紙が最高によい。ア氏問題で質問があればまず久保田宛によこされたい。しかし私は超多忙なので、月例会で質問を出されるのが最上である。

また個人で直接にビスタを訪問する場合は、ステックリング氏宅が事実上の米GAP本部になっているので、そこへ行くこと。事前に必ず了解を得ること。ビスタに長期滞在をしないこと（車を持たぬ日本人の長逗留は彼らにとって大迷惑になるのだ）。初歩的な質問をしないこと。英語が達者であること。達者でなければアダムスキー問題に精通した通訳をつれて行くこと。以上の点を厳守されるようお願いしたい。

この実り多い研修旅行を実現させるために有形無形のご援助を惜しまれなかった方々に再度、心からお礼を申し上げる次第である。この旅行の記憶が私の胸から消えぬ限り、その方々の氏名も消え去ることはない。

●エリシア・ステックリング嬢

付記2

本文中18頁に述べたチャーチワードの「ムーの宇宙力」と題する原書のうち地球のガスベルト説を掲げた第二巻はすでに「ムー大陸の沈没」と題して邦訳が大陸書房より出ていたことが帰国後遠藤昭則君の話によりわかった。しかも昭和四十七年に初版が発行されていた。

その説を要約すると――、惑星が誕生する際は大宇宙に存在する大求心力がガスを凝集させ、これが渦動を続けるうちに熔解状態から地殻の形成に至るのだが、固形化しない高熱のガスが地球の基礎岩盤内にとじこめられて、気泡のように存在し、更にトンネル状をなして世界中の地下を網目のようにはう。この爆発力の強い火山ガスの充満した網目をガスベルトと著者は呼んでいるが、これらの爆発に伴う地殻の陥没、沈下、隆起等がいわゆる大地震であり、大昔のムー大陸もこのガスベルトにより海底に沈んだという。

日本列島はどうかというと、太平洋環状ガスベルトやその他数本のベルトが貫き、「これほど狭い面積に、これほど多くのガスベルトが交錯し、接続している地域は地球上ではほかにない」という危険きわまりない様相を呈している、ということになっている。数種類の日本地図と共に黒いガスベルトの線が伸びている図が掲載されており、これらは火山脈に一致するようにも見えるが、ガスベルトというのは火山脈とは異なる別種のものらしい。

しかしこのガスベルト上には多くの火山が重なり、その最大級は富士山で、これがいつ大爆発を起こすかわからないとほのめかしている。つまり火山の大噴火はガスベルトの噴出というわけだ。一九二三年九月一日の関東大震災にしても、著者チャーチワードは地震学者の諸説を否定し、この原因は「西太平洋の島々から日本に伸びるラドロン・日本ガスベルト、このガスベルトは横浜付近の地下を通り、やがて一つのガスの放出口に達する。それが富士山で、ガスベルトの上端のいわゆる噴気口からガスが放出されている。（関東）大震災の原因は、疑いもなく、この危険なガスベルトにあった」（同書221頁）と述べている。

また一九二五年五月の城崎・豊岡大地震も現地の地下を走る太平洋環状ガスベルトのせいであるとし、「この地震は、

明らかに火口から数キロへだたった所でガスベルトがふさがったために起きたものである」（同書222頁）と記されている。

その他、日本列島の地下をはう複雑なガスベルトがおそろしく精密に描かれており、また世界中の主要なガスベルトについても詳述してある。そして太古から世界各地で繰り返された大変動による大地の消滅や出現等を古文書の解説により説明し、地質学や地球物理学的な知識も盛り込んで興味深い記述をなしている。しかし全体から受ける印象では、このガスベルト説はあくまでもチャーチワード個人の仮説として述べられたものであることに気付く。驚異に価するほどの博学多識なチャーチワードも、科学的な調査によってガスベルトの存在をつきとめたのではないようだ。

しかしホワイティング氏によると、現代の科学者で、このガスベルト説に関心をよせて研究を始めている人が少数いるという。

ただ、ここで筆者がチャーチワードの諸説をとりあげるのは「彼の説の八十パーセントは正しい」とアダムスキーが語った点にある。このことは三年前にステックリング氏が来日した折、聞いたのだが、それ以来筆者はチャーチワードに関心を持つようになった。アダムスキーはおそらくスペース・ブラザーズから聞いたのであろう。ここに興味がそそられる要因がある。

ところが最近出た「サイエンス」誌八月号に、「地震と地球深部のガス」と題する学術論文が掲載されている。どうやら科学者も気付き始めたらしい。その意味でチャーチワードの「ムー大陸の沈没」（一二〇〇円）を一読されるのもわるくはないだろう。

付記3

今回の渡米で語学についてあらためて考えさせられた。筆者は決して外国語に堪能ではなく、その道を専攻した者でもないが、多年多大の関心を寄せて多少とも勉強を続けたので、一言述べたいことはある。

外国語の習得に知能は直接の関係はなく、とにかく〝慣れ〟が最重要である。ビスタに住むセルチャウ康子さんも、当初はレストランへ入って英語で食事の注文をするのにも胸がどきどきするほどだったが、慣れてみると英語は決してむつかしい言語ではなく、今は全く不自由を感じないと言っていた。

この〝慣れ〟というのは「少々間違った言葉をしゃべっても羞恥心を起こさなくなった段階」を意味するようである。ところが日本人は英語というものをあまりに神聖な学問とみなし、完璧にやらなくてはいけないと思い込み、そのために心理的に萎縮して、いざとなると声が出なくなるのである。

これは学校教育の一大欠陥で、なんのことはない、日本では人生で役立つために教える教科を逆に役立たせないようにしている有様だ。この弊害を除去するには、中学の英語を必修から選択に変えてやりたい者だけに学習させればよいのだが、ここで学校教育について云々する余裕はないので、話をもどすと――、

根本的には、英語を学問だと思わずに日本語の方言を覚えるのだ、ぐらいに気軽な気持でやることが大切である。といって耳で覚えた怪しげな発音による単語の羅列式会話を得意になってやるようになっても拙い。もっといけないのは、こうした人が、全く外国語のできない人を無能視して軽べつする風潮で、これは鼻持ちならない。

だから気軽にやるといっても、一通りの文法は学び、正確な発音でゆっくりめにしゃべるのが外国人にも好感が持たれるのである。相手のまねをして、やたらと早口でしゃべらないことだ。

外国に住んでいる人は慣れるだろうが日本で日本語の大海の中に住む我々が外国語に慣れるのは至難の業だと言う人もあるだろう。たしかにむつかしいけれども今は昔と違って便利な機械類が多い。テープレコーダーもその一つで、これを利用しないという手はない。しかもソルに利用するのである。

まず小型のテレコを一台奮発して絶えず手から離さぬようにし、英語のテープを聴いて聴いて聴きまくり、耳から慣らしてゆくのである。このテープの選択を誤ると具合が悪いが、なんといっても中学の英語教科書を主体に学習し、この本文を外人が朗読したテープが市販されているから、これを入手してテレコで聴くのである。「中学の英語なんてバカらしい」と軽べつする人は上達をあきらめたほうがよい。実はこれが最重要であることは、「中学英語をマスターすれば、国連大使になれるほどの会話力が身につく」といわれることからもわかる。これを無視してさまざまの会話書やテープ類をあさっても目移りするだけでまずだめだろう。日本に住む日本人が外国語を学習して安上がりで効果をあげようと思えば、このテープを聴く方法以外に良策はない。

「テープばかり聴いても、自分がしゃべり、それに応えてくれる相手がいなければ、仕方がない…」と言って全然やらぬ人も、まず上達の見込はない。

右の方法を徹底的にやる一方、小金をためて、アメリカなりイギリスなりへ短時日の旅行を試みて英語圏の雰囲気に直接触れることも重要である。現地でアメリカ人の生きた英語を耳にしてあるいは戸惑い、あるいは歓喜する。そして英語なるものに夢想的な憧れよりも現実的な親近感を持つようにする。

どうしても海外へ行けない人は、東京の帝国ホテルのロビーへ行くとよい。外人がうようよしていて生きた英語がふんだんに聴ける。東京にも出られない人はそれこそテープに頼る以外はない。

日本では、英文は少し読めるが書くことも話すこともできないという人が圧倒的に多い。しかしこうした白紙状態の人ほど、しゃべる英語を覚えるのに都合がよいのである。その都合のよい立場を生かして、まず中学一年の英語から始めるべきだ。

一口に英語といってもアメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語その他、さまざまな分派がある。そのどれが

よいかはむつかしい問題だが、客観的にみて、アメリカ発音よりもイギリス発音のほうが美しく響くことは事実である。しかも両者にはかなりの開きがあるから学習に際しては、どちらか一方にきめてかかることも大切だと思う。

しかし決してむつかしく考える必要はない。アメリカにいる他国人で——特に中南米系の人で——ひどい発音ながら平気で英語をしゃべっている人がかなりいる。ステックリング氏はドイツ人なので、その英語にはドイツ語訛りが相当に出ているけれども本人は一向に意に介する様子もなく、アメリカ人のごとく英語をしゃべったり書いたりする。そして周囲のアメリカ人は何とも思っていない。どうも日本人は外国語の学習をあまりにも難事と考えすぎるようだ。

といっても発音はやはり正確にやるに越したことはない。数年前、メキシコ市の国立人類学博物館内で、中年のメキシコ人ガイドが、イギリス人と思われる五名の家族に、美しいイギリス発音でゆっくりと説明しているのを聴いて魅了されたことがあった。ああいう調子でやればよいのだなと感心したけれども、なかなかそうもゆかず、アメリカへ行けばどうしてもアメリカ発音になり、しかも俗語などが無造作に口から出るようになる環境の影響はおそろしいものだ。

しかしアメリカGAP本部の方々や、そこへ来る各国のリーダーたちはみな語学が達者である。ホワイティング氏はスペイン語が得意で、こちらがスペイン語で話しかけると喜んで応じる。他人の前で外国語を口に出すことをキザだとみる日本の風潮とは逆に、彼らは実に気軽に異国語をしゃべりまくる。こうした率直さも大切なのだろう。

数年前、8㎜のサウンド映画で英語の教材を作る企画を知り合いのある映画会社に持ちかけたことがあるけれども、簡単に断られてしまった。理由は、ビデオが普及してきたからだという。しかしまだ高価である。あのときの提案によって8㎜の教材を製作すれば爆発的に売れたのではないかと残念に思う次第だ。

なお左下の広告の拙著はABCから始めようとする全くの初歩の人には不向きであることを付言しておく。

付記4

アダムスキーの宇宙的な体験をめぐって驚倒すべき出来事が多く発生していたのだが、その一つにある大統領との関係がある。この大統領はアダムスキーと親交があり、ひそかに熱烈な支援活動を行っていた。ア氏が存命の頃はビスタのGAP本部をも訪問しており、行き詰った地球の現状を打開すべく宇宙への進出を画策し、ア氏にはホワイトハウスのフリーパスを与えて、しばしば助言を受けていた。スペース・ブラザーズともコンタクトしていたのである。

以上の事実は一般のUFO研究界で全く知られていない。いまだにア氏のUFO写真をトリックだと称して騒ぐ連中は無知を通り越して盲目としか言いようがない。

しかし本文にも述べたとおり、世界の歴史なるものの半分は虚偽で固められており、その虚偽が教科書に記載されて学校で教えられるので人々は何の疑いもなく信じてゆく。こうして大衆は真実から眼をそらされるか、または驚異的な事実が明るみに出ても簡単に否定するのである。「学校で教わらなかったからだ」と。

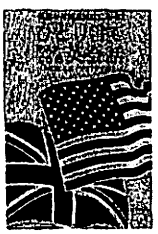
近年アメリカで「キャトル・ミューティレーション」という不気味な事件が頻発して、宇宙人の仕業だとまことしやかに伝えられた。血を一滴も残さずに牧場の多数の牛の臓物がえぐり取られて無残な最後をとげていたという事件である。

しかし犯人は宇宙人ではなく地球人である。この原因をたどると、結局は第二次大戦のある終戦秘話が浮かび上がってくる。しかもこれに関連して戦後ある種の地球製UFOによる奇怪なコンタクト事件が発生し始めた。お化けのような宇宙人、硫黄くさい船内での身体検査、セックス・チェック、上昇時のすさまじい火炎や噴煙etc。こうして真実の宇宙人とニセ宇宙人が混同されてしまい世界のUFO界は混乱の極に達してしまった。恐るべきは人間の盲目ぶりである。というよりも盲目に甘んじようとする態度である。

英語を母国語同様にする！

ひとり言で（ごと）マスターできる英会話

久保田八郎／アン・デイカス



企画書店で絶賛発売中

■英語の語感を身につけて母国語同様にするには、英語で考える習慣を身につけねばならぬ。英語で考えるためには、自分自身の日常の行動に際して、英語でひとり言をつぶやくに限る。これこそ英語を自分のコトバにする魔術的な方法である——という著者久保田八郎は多年の研究と実験の結果、ついに秘法を公開した！　これこそ他に全く類のないユニークな学習書であり、これにより、読者はむぞうさに英語を口から出すようになって狂喜し、〈英語で考えることのできる世界〉を作り上げて、英語圏内に住む一人となるのだ！

■本書の主体をなす第1部では、丸の内の大貿易会社につとめる混血の青年ユキオ・ブラウン君の春の一日がストーリーとして展開し、その間たえずユキオが英語でひとり言をつぶやきながら行動する。読者も一人のユキオになって、日常生活で彼と同じ英語をつぶやけばよい。そのようにして"慣れる"のだ。第2部は英語のひとり言の重要なきまり文句集。第3部は外人にものを頼むときの模範的会話集。第4部は英語の文語体と口語体の相違を豊富な例文により解説。冒頭の「発音上の注意」や全巻にわたる脚注と共に、一般に知られていない意外な事実を多数洩らしている。

B6変型判・159頁・厚手上質紙使用

￥720〒120（日本GAPでは取扱いません）

主婦の友社　〒101 東京都千代田区神田駿河台1－6　TEL.（03）294-1111（大代表）振替・東京2-180

コンピューターによるUFO写真の真偽判定は正しいか

日本GAP会員
田畑　宏

最近の某誌にはコンピューターによるUFO写真の画像処理の記事がよく載っています。筆者達のコンピューターでもインターフェイスさえあれば、この技術を使えるのですが、今のところ、やる予定はありません。

この技術は、写真またはネガのグラデーションに一度光を透過させて、その透過度を光電管等で電気の量（アンペア）に変え、さらにA—D変換回路（アナログ→デジタル）で2進数に変換し、プログラムで指定した記憶エリアにストアするものです。より正確な変換はコンピューターのグラフ機能によって決まります。コントラストを大きくするには、A—D変換回路の前に電力増幅回路を設ければよいのですが、増幅率が千倍などと大きくなればノイズも大きくなるわけで元のデータが隠れる恐れがあります。

一連の装置のオペレーターやプログラマーは、故意に「誤まる」ことも充分に可能で、いわばどんな結果をも出力することができます。素人は「コンピューターは絶対に正しい」と思い込んでいますから、だますのは簡単です。

この方法は、ご存知のとおり、白黒の濃淡または色の濃淡を検出して、コントラストを強めたり、さらにプログラムに数ステップのカラー用の命令（インストラクション）を加えて色をつけるものです。そうすれば空中の糸や遠近感、丸みをモニターテレビに出すことができます。そこでUFO写真にもどります。

ニセ写真はこの技術ではっきりわかることはご存知のとおりです。先般アダムスキー氏の写真がニセだという記事がありましたが、応用されたデータとしてはまさにそのとおりで疑問の余地はありません。

しかし写真技術の面から見ると、大きな欠陥があります。

一つはプリント写真の化学物質共有の性質の劣化があります。PCBといった非常に安定した物質は別として、大抵は紫外線や空気、温度変化、湿度、さらにカビによって経年変化を生じます。これらの因子の相乗作用は一週間ぐらいではどうということはありませんが、十年もすぎると大きなものになります。特にカビの力が大きく、白い印画紙が茶色になったり腐ったりするのは、まずカビの作用です。

二つ目は定着液です。毎年新しい薬品が出ていることからみても、十年も二十年も昔の薬品が劣っているのは明らかです。

以上の二点から、仮に二十年も前に当時の最高の技術で撮影し、現像し、焼き付けたとしても、恒温、恒湿、無菌、無光の容器に入れたのでなければ、ネガも印画紙も劣化してしまいます。

古い写真を見返すとすぐわかることですが、変色、わん曲、コントラストの消失が見られるはずです。したがって被写体の遠近感が残っているかどうかは疑問です。UFOの画像処理を単にUFOの知識とテレビ技術とコンピューターの投術だけから見た場合と、別に写真技術を加味して見た場合とでは、結論が逆転するわけです（前者＝否定、後者＝否定でない）。

現在、UFOの専門家と自称して言いたい放題のことを言っている人達のなかで、右の技術を持っていたり、助言できる人は、何人いるでしょうか。

フィルムは $AgI \rightarrow Ag + \frac{1}{2}I_2$ で遊離した銀(Ag)が多いほど黒くなりますがもし光が強すぎると完全に遊離してしまいます。逆に弱すぎると遊離しません。つまりある一定範囲でのみ光量を再現できることになります。そこで、もし被写体があまり明るすぎると、のっぺらぼうになって、コントラストはどこにもなくなります。

カブリやレンズの収差の問題もあります。アダムスキー氏のカメラが現在のニコンと同等のメカを持っていたとは思えません。

結論として、以上の観点から、UFOの画像処理技術は印画紙やフィルムの劣化がたいして大きくない、せいぜい十年前までの対象について有効です。それ以前の写真については劣化の影響を考慮しなければならず、UFO写真の真偽を明確には判断し得ないことになります。

最後につけ加えますと、ある一つの技術もしくは考え方に固執するのあまり、木を見て森を見ないという状況に落ち入ることがよくあります。一つの技術にも無数のこまかな問題がありますので、つい、とんでもない結論を出しがちです。アダムスキー氏の写真に対しても右のようなことが生じたわけです。

もっと馬鹿な人は、右のような結論をうのみにして大騒ぎしている人です。前記の技術を理解できずに騒ぐのは最底です。

大体にUFO問題には専門家が少なすぎます。技術者もほとんどいません。「三人寄れば文殊の知恵」とは優秀な人達の場合であって、素人の場合は何百人集まっても「百家争鳴」でしかなく、役に立ちません。コンピューターのプログラムを組む場合には、このことがいっそうはっきりします。少しむずかしい、特に大学程度の数学や理論、または特殊技術を利用するプログラムを組む場合、実力差が明確にわかります。アホが千人いてもコンピューターですぐれた成果をあげることは絶対に不可能なわけです。他の分野でも同じでしょう。このことを知って（または気づいて）いる人がUFOマニアのなかに何人いるでしょうか。

質疑応答

（最終回）

スティーブ・ホワイティング

1978年度日本ＧＡＰ総会における質疑応答の完訳

問17　遺伝と過去世における人格が、人格形成にどのように関与し、どれほどの影響力を持つのでしょうか。過去世を持たない人間は存在するでしょうか。

答　人格は一生涯から次の生涯へ持ち越されますが、これは個人によってその度合が異なります。これに対する一般的な法則はありません。個人の好き嫌いとかある種の食物に対するより好みなどは持ち越されません。しかしある文化またはある信仰に対する一般的なフィーリング、または一般的な親近感などは、すぐ前の前生に自分が行った活動の程度に応じて持ち越されます。

あとの質問に対しては、これはきわめて複雑な問題でして、現在この地球では過去世を持たない〝新米〟はいないと言えばよいでしょう。私たちはみな多くの場所で多くの経験を持ってきたのです。

問18　対人関係におけるトラブルで、いわゆる性格の不一致が原因となっている場合、そのトラブルを修正するには何から始めるべきですか。

答　二人の人間のあいだで性格の不一致のトラブルが起こる場合、これを除く唯一の方法は、他人に対して自分が持っている想念や感情をあからさまにすることです。むつかしいことかもしれませんが最初にまず信頼関係を確立する必要があります。相手の考え方に同調できなくても、相手の考え方を理解することによって、自分と一緒にいるのが心地よいことを相手に感じさせるのです。

次のことを銘記する必要があります。私たちはときとして自分の考え方とは全く異なる考え方を持つ人に会ったり、そのような人と交わらねばならぬ環境におちいったりしますが、自分も過去世において、かつて相手と同じ考え方を持ったことがあるかもしれないということを知るのに役立つかもしれません。そのとき相手のだれかが自分に対して寛容的であったのと同様に私たちも相手に対して忍耐強く寛容的である必要があるのです。

問19　まず転生について。転生には数秒間を要するのみということですが、実際はもっと多くの時間がかかるのではありませんか。その理由として、魂が肉体を離脱して別な空間へ行く場合、その空間は時間を超越していると考えられるからです。他の理由としては、エドガー・ケイシーその他の透視により、現世にはアトランティス時代の人間が数多くいますが、しかし数百回の転生をしていないからです。

次に、ジョージ・アダムスキーはチベットで修行したことがあると聞きましたが、これをもっと詳細に知りたいと思います。

答　これは複雑な質問です。ひとつずつ取り上げてみましょう。

まず第一に、転生には二～三秒間を要するだけといわれています。そこでもっと長い時間がかかるのではないかという質問ですが、実際には二～三秒でもたぶん長すぎるぐらいです。このことは転生の原理に対する人間の理解が乏しいので二～三秒間といっているのでして、実際は、転生は瞬間的なものであり、時間は全く関係ありません。

エドガー・ケイシーの書物を調べて言えることは、彼の透視は心（アイデア）の体験であって、意識の体験ではないという事実です。ケイシーの報告や発見は、この聖なる力すなわち意識と接触しようと試みた結果もたらされたのですが、しかし彼が到達した結論は、彼の心の反応に基づいたものでした。だから彼が透視したのは彼自身の意見であり、的確な背景を持たなかったために、正確に体験したことを述べてはいません。

転生は百回以上も起こっていないという質問でしたが、これはケイシーによるものと思います。転生の的確な回数というものはありません。人間は永遠なるものですから、永遠に生まれ変わり続けます。ただしこの法則の例外は、人間が生命の法則に従って生きようとしない場合に起こります。その場合、本人は（生まれ変わりの）滴期に達するのです（訳注＝あとは消滅して生まれ変わらないの意）。

アトランティス時代に生きた人が現在も（転生して）生きているという質問は、時間の持続を考えればあり得ることです。アトランティス時代に生きた人が今日の社会に多数生きています。たしかにムー大陸で生きたと思われる多くの人も現在生きています。歴史上では四～五万年昔の大陸です。この長い年月は莫大なもののように感じられますが、実際は一瞬間にすぎません。なぜなら生命は時間というものを知らないからです。

そして意識は常に永遠であるために、時間によって影響を受けません。したがって転生は瞬間的に行われるのであって二～三秒間というのは理解のための便宜上、設定した時間にすぎません。転生は心臓の一鼓動から次の鼓動に移るぐらいに瞬間的なものです。

アダムスキー氏のチベットにおける体験ですが、これについては氏が私に話してくれた限りの情報をお伝えできます。

彼は十代のなかば頃、チベットで数年間をすごし、スペース・ピープルが開設していたコズミック・スクールの一つで学習しました。そのときの体験が現世でなさねばならなかった仕事を行うのに役立ちました。

宇宙の法則は地球と同様、他の惑星でも同じですが、その応用はときとして異なります。これは地球の諸条件や地球人の生き方のためです。したがってアダムスキーにとっては短縮する必要がありました。

問20　なにゆえに性的欲求の強い人と弱い人が存在するのですか。これはカルマによるのでしょうか。

答　大抵の場合、カルマによるものでは

ありません。この現世における条件により起こる理由は複雑ですが、性欲を含む肉体的な感情のほとんどは母親の妊娠時や生誕時の条件、思春期の教育などに起因します。一個人が肉体的に妊まれる場合両親が不安定な状態にあるとき、たとえば好き嫌いがあれば、生まれる子供もその好き嫌いをあらわします。反対に一個人が両親の宇宙的な愛に包まれて妊まれるならば本人もその愛をあらわします。

したがって人間は両親の肉欲の燃えさかる瞬間に妊まれるならば、本人は少なくとも肉体的に肉欲が強くなります。しかしこのことは肉体細胞から来るこうした肉体的印象に打ち勝てないという意味ではありません。打ち勝つにはかなりの自己訓練を要します。

問21　アダムスキーは宇宙人とコンタクトする以前に独自の宗教を広めていたということですが、これについて知っている限り説明して下さい。次に、シャーロット・ブロップの活動についてGAPではどうとらえているか説明して下さい。

答　アダムスキーが履修した哲学や個人的に教えた哲学は、あなたがたが「生命の科学」の中で読んでおられる哲学と同じものです。言い替えれば、アダムスキー氏が一九五二年にコンタクトする以前と以後の哲学的見地や教えにほとんど相違はありません。

アダムスキー氏は成人期において、いかなる宗教団体に属したこともありませんし、特定な宗教を支持したこともありません。幼少時にカトリック教会で修行したという背景はありますが、これは両親の要求によるものです。しかし成人してからは、いかなる宗教にも関係しておりません（訳注＝アダムスキーがコンタクト以前に広めていたのは宗教ではなく、宇宙の法則探求の哲学であるの意）。

シャーロット・ブロップについては、いろいろと言われていますが、私たちはこの問題に深入りして時間を浪費したくはありません。あなたがたの多くはすでにこの問題についてお聞きになったと思います。

私が言いたいのは、GAPやジョージ・アダムスキー財団は、シャーロット・ブロップやそのグループに全く何の関係もないし、世界各地のGAPグループやジョージ・アダムスキー財団関係者は、彼女の活動やその主張を一切支持してはいない、ということです。

先にも申しましたように、アダムスキー氏がスペース・ピープルの援助のもとに**私たちに伝えてくれた原理や哲学をゆがめることなしに広めるのが**GAPやビスタのアダムスキー財団の目標です。私たちがアダムスキー氏を非常によく知ってきたために、シャーロットのグループの活動を支持できないというのは、以上の理由によるものです（訳注＝ア氏の哲学をゆがめないで伝えなくてはならないという理由を意味する）。

問22　NASA（米航空宇宙局）の惑星探査の結果、生命体の確認はできたのですか。次に意識と心を一体化できる人は、ピラミッドパワーに似たエネルギーを放射できると考えられますが、いかがですか。

答　他の惑星における生命存在のシルシについてはNASAの公式声明が出されています。おおやけには世界的にこのような声明が出されたことを私は知りませんが、非公式に、**ある半官半民サークルでNASAが諸発見の多くを認めています。**これがもし一般に発表されると、この問題（生命存在の問題）に関するあらゆる疑惑が消えるでしょう。NASAは現在、充分な情報を持っているのです。

あとの質問ですが、ピラミッドによって凝集されるエネルギーは電磁気的なエネルギーです。個人が高度な精神的状態で放射するエネルギーは、電磁気的エネルギーよりも高次なものです。その波動は数千倍あり、はるかに強力です。

人間が強力な信念を持つならば山をも動かすことができるといわれていますが**意識の力を最大限に高めるならば、人間によって動かせないものはなく、成就できないものはありません。**ただし英知をもってこれを応用すれば、です。

問23　これからのGAP活動をどう思いますか。あなたがアダムスキーと知りあったきっかけは何ですか。

答　GAPが計画してきた活動の未来への方向は世界各地によって異なります。ヨーロッパでは政府の指導者とともに活動しているGAP代表者（複数）がいますが、これは小さい国の指導者は大国のそれよりも貸す耳を持っており、私たちが提供するアドバイスを取り上げやすいという事実によるものです。アメリカでは状態が異なります。私たちは政府と密接な関係を保っていますから、国連に協力しているのです。

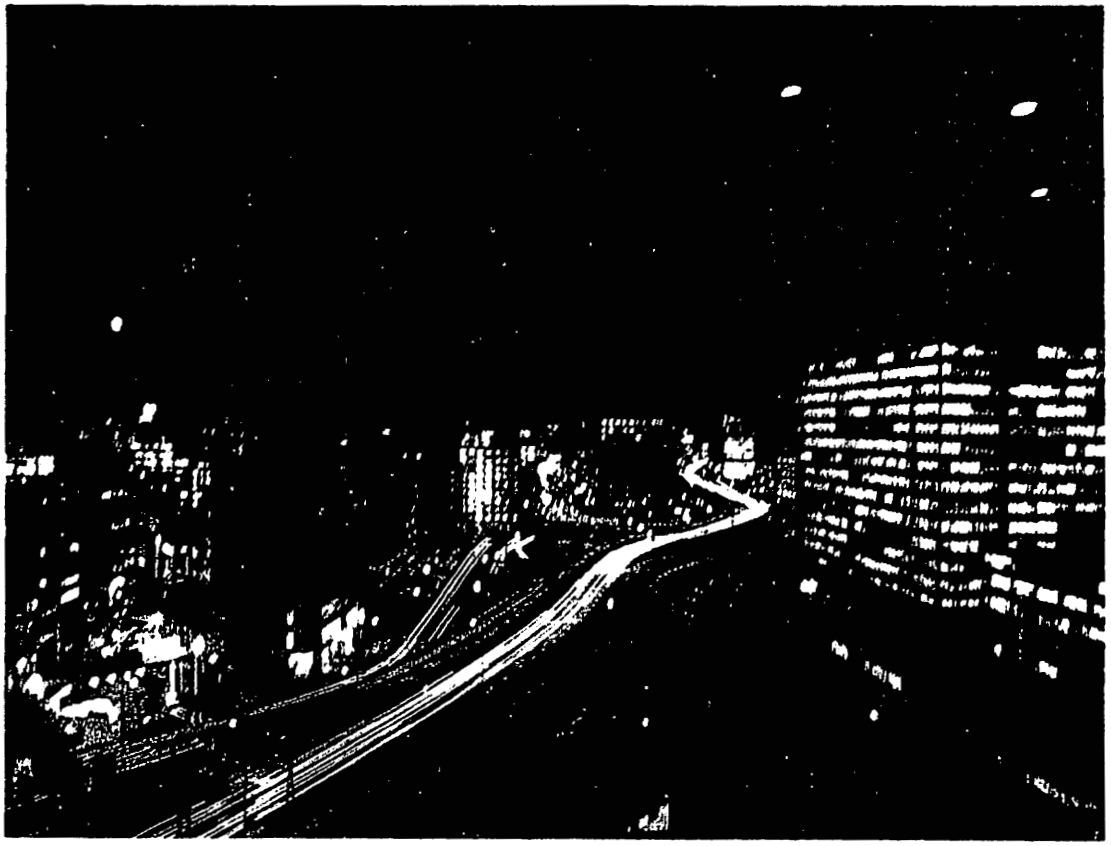
将来に関しては、本日のこの大会ほどに有利な方法があるとは思えませんが、遠からぬ未来に、国際的なレベルで本日のような総会を開催したいと考えています。なるべく便利な位置に場所をきめて各国の関心ある人々に集まってもらうというものです。そうすればアイデアや方法などの意見の交換もできます。これは次の段階であって、数年後には実現させたいと思っています。

次の質問ですが、私は一九六一年、まだ子供だった頃にイリノイ州シカゴの近くで幸運にもアダムスキー氏に初めて会いました。それ以来、私は氏について学び、氏が住んでいたカリフォルニアへ氏を慕って来ることができて、一九六二年以後は、時々そこを私の居住地にしてきました。

問24　UFOコンタクティーや目撃者や使命を帯びて生まれてきた人々のまわりには超小型UFOがつきまとっていると聞いたことがありますが、これは本当ですか。

答　スペース・ピープルは「宇宙船の内部」で述べられているような、情報蒐集のための円盤を用いています。これは直径約三十センチの小型で、人間の眼に見えなくすることもできますが、常に特定の個人のまわりを飛んでいるわけではなく、個人に関する情報や特殊な事件の情報を集めるときだけ発射されます。（終）

久保田八郎訳



● 東京上空のUFO

昨年12月３日，都内大手町の竹橋会館でＧＡＰ会員・岡部憲明氏（東京）の盛大な結婚披露宴が挙行され，終了したあと，撮影担当の自然写真家・木原和人氏（千葉県）が会場ロビーで夜景を撮っていたところ，突如３機のＵＦＯがファインダー視野内に飛び込んで来たという(写真右上の光体)。編者も披露宴に出席したが，この写真撮影時にはすでに帰途についていた。

会員の声

投稿歓迎。「会員の声」宛と記し適当な用紙を使用。タテ書き。字数自由、匿名可。但し住所本名明記。

素晴らしかった河口湖バス旅行

東京　斎藤泰文

過日は素晴らしい旅行に参加させていただきましてありがとうございました。体中の細胞が息を吹き返し全身がリフレッシュされたとてもいい気持です。この気分が消えないうちにとペンをとりました。

十七日、新宿からバスに乗車していらいずっと楽しい洗練された高度な雰囲気が続いていました。特にウインナワルツから始まってベートーベン、ヴィヴァルディー、モーツァルト等の音楽にひたりながら旅行ができましたことは至上のよろこびです。

この旅行では沢山のことを勉強させていただきました。わずか一泊二日の短期の旅行ではありましたが、いろいろな人と話をし、またさまざまな人の考え方にふれ、そこから自分を全く別な角度から洗い直すことができて、ずいぶん成長したような気がします。

日々の糧を得るためとはいえ虚偽、欺瞞、嫉妬、権謀術数等、仮面をかぶった暴力の渦巻く職場の中で一応涼しい顔をしていなければならない矛盾に耐えきれず、月一回のGAP月例会を唯一の生き返る機会にさせていただいている私にとって、十七日夜の（旅行での）夕食会、それに引き続くダンスパーティー、そしてそのあとの三次会は本当にいのちの洗に潤なりました。

ふだん職場で酒を飲む機会も多くまた自分では酒はきらいな方ではないため、ついさそわれ、相手の話の一元性にあきあきして、なかば自暴自棄で酒にひたっていた私が、本当にうまい酒が飲めたなあとしみじみ振り返っています。

特に十七日夜の三次会では塙氏、山木氏をはじめ参加女性全員の方々や、小方氏、鈴木伸一氏その他大勢のGAP会員の人たちと腹をわって心ゆくまで会話することができました。午前三時までもアルコールの相当入った私の言いたい放題の言動を許して下さった皆さんに感謝の気持でいっぱいです。

翌十八日もすばらしい一日でした。富士山五合目付近の雪のためコースこそ逆まわりになりましたが、そのことでかえって観光地特有の交通渋滞にわずらわされることもなく、新雪で化粧直ししたばかりの神々しいほどの富士の頂を仰ぎ見ることができ、細部にまで張りめぐらされたプログラムの精妙さに畏敬の念をおぼえます。

そのほかに新芽でいっぱいの雄大な富士のすそ野をドライブしながら広い牧場でのんびりと草をたべる牛を見ることができたこと、白糸の滝やローカル色豊かな楽しい昼食、造化の妙を感じさせる天然冷蔵庫のような風穴を見学できたこと等々、楽しい思い出でいっぱいです。

また昼食後の一時、西湖の湖畔に出て、さわやかな緑の風に吹かれながら先生を中心に大自然に融合するGAPの姿を写しとるロケに参加することができましたが、このことは「何か」を感じさせる素晴らしい体験です。

帰りの車中ではわざわざ飲み物のプレゼントまでいただきましてほんとうにありがとうございました。中南米音楽の軽快なリズムに乗って会話をかわすことができ、愉快だったと思っています。

最後になりましたが、このような素敵な旅行を企画して下さった先生ならびにワールドセブンの田中氏、その上司の方、運転手さん、ガイドさん、そして他の大勢の旅行に参加されたGAP会員の皆様方に対し、はかり知れない感謝の意を表して筆をおきます。ありがとうございました。

近年における宇宙船の目撃報告

東京　井口才司

目撃日時、一九七九年二月九日金曜日午後一時三十分頃から一時四十分頃までの間。目撃継続時間、約六分十秒間位。天候、晴。目撃場所、東京千代田区丸の内二の三の二、日比谷通りに面したパリ国立銀行のある郵船ビルの地点より、丸の内二の一、明治生命館のある地点まで。

何の用事で行ったのかは忘れましたが、確か、その日、用事が終わって家に帰るのに、新宿方面へ出るのではなくて、回り道をして渋谷へ出ようと思い、渋谷行のバスが通っている日比谷公園のそばの晴海通りまで歩こうと思いまして、東京駅の丸の内北口から皇居外苑、馬場先濠のある方向へ歩き、日比谷通りに出たのです。角にパリ国立銀行のある郵船ビルがありまして、その角を曲がる直前に私の心が次のように思ったのです。「案外、この角を曲がったら宇宙機（空飛ぶ円盤）が見えたりしてね」と。しかし、軽くそのように思っただけです。そして次に、その角を曲がって西の空の方向を見ると、霞が関ビル（最初、このビルが霞が関ビルとは知りませんでした）の最上階の附近に浮かんでいる宇宙船のような物体を見たのです。

その物体を見た時、どこかのビルか、または、企業が打ち上げているバルーンかな？と思いましたが、しかし、自分の視力が良くない事もあるのですが、バルーンと思った物体の下方には、それをつなぎとめておく綱らしきものは見えないので「もしかしたら」と思ったのです。なにしろそれまでに宇宙機を目撃した事は二度ほどあるのですが、宇宙船（母船）を目撃した事は一度もなかったので「もしかしたら」と思いつつも心は懐疑的であったと思います。しかし日比谷公園の方向へ歩きながらも物体からは目を離さずに長い間見続けていました。その形状は横に広がったバルーンのような、それでいて飛行船のような形、色は濃い黄色からオレンジ色の中間のような色でした。物体の大きさは正確にはわかりませんが、横幅（全長）は霞が関ビルの奥行の長さ以上はありましたから六十メートル位でしょうか。物体の上下幅（全高）は全長の三分の一位だったと思います。

最初に見てから、およそ三分ほど経過した時、その物体は霞が関ビルの方向へ、ひっぱられるようにゆっくりと移動しましたので、そのビルの屋上に、誰かがいて、実験用のバルーンを引き寄せているのかな？と思いましたが、そうではないような気もしていました。そうすると、その物体は、また元いた位置に戻るように、そのビルからゆっくりと離れるように見えました。そうすると、次は風にでも流されるかのようにその位置から右の方向、皇居寄りの方向へ少しだけ移動しました。私がその物体を見ながら日比谷方向へ歩いていた時、前方から二人の女性が歩いて来て、その内の一人が、やはりこの物体に気づいたらしく、もう一人の女性に「ねえ、あれ、そうじゃない？」などと話しかけているのですが、もう一人の女性は関心がないらしく「違うわよ」とか言っていました。

そうこうする内に、信号のある所へ来たので、信号待ちの為に立ち止まって見ていました。そして、信号が青になったので横断歩道を渡っていたのですが、皇居外苑に一本の大木があって、その横断歩道の途中から渡り終わるまでの間は、位置的にビルも物体も大木の陰になってしまい見る事が出来なかったのです。そして、横断歩道を渡り終わり、再びビルが見える位置へ出るその前に、また、私の心が次のように思ったのです。「次に見た時にはもう消えていたりしてね」と。ここに来るまでの間、六分間以上も目撃していたというのに、私の心はまだ疑ってい

たのです。というより宇宙船であると確信出来なかったのです。そして、次に霞が関ビルを見た時には、その物体はもう見えませんでした。ビルの周囲の空が良く見える位置まで来ても、もうどこにも見えませんでした。大木の陰になって見えなかった時間は、約三十秒間でした。その三十秒間の間に物体は姿を消してしまったのです。

ここに至って、やっと、あの物体が宇宙船であったと九十九パーセント思うようになりました。九十九パーセントというのは、私の疑い深い心が、なおも、あの物体はバルーンだったのではないか?と疑念を抱いていたからなのです。もう、こうなったら渋谷へ出て家へ帰るのはやめることにして物体のすぐそばに見えたビルが何というビルなのか、出来ればそのビルの屋上近くまで行って調べようと思い、歩いていったのです。

そして、そのビルが霞が関ビルだという事がわかったのですが、そこへ行くまでに、いろいろと歩き回って調べ、バルーンではないと思うようになり、確か、その日は夕方遅くなったので、そのまま帰ったと思います。

そして、くわしく調べようと思って、三日後の二月十二日にふたたびその目撃した場所へ行って目撃継続時間などを調べ、そして霞が関ビルの展望台に上って、物体のいた位置の側へ行って、眼下に広がる景色なども見ていたのです。そしてその日の午後四時四十五分頃から霞が関ビルの三十六階展望台より東京湾方面で一回、新橋方面で一回、新橋から右側の東京湾方向で一回、それぞれ瞬間的に光る光体を見ました。それぞれの光を見た間隔は三分位でした。未確認の光でしたが、ネオンの光などではなく、その光が見えた後その場所をずーと見続けても、後は何も見えませんでしたが、私はその光体がスペース・ファミリーのものであると信じます。それで、その日に、もう一度調査した結果、私が二月九日に見たものは宇宙船であったと確信するようになりました。以上が、私が初めて宇宙船を目撃した時の話です。

その他、一九七九年度には、五月二十六日土曜日午後五時四十分頃から四十五分頃の間に、京王線千歳烏山駅のホームより、北の方向、仰角四十度から五十度位の位置に滞空する、二個のボール状の極小型円盤(そのように感じました)を見ました。

そして、GAPのアメリカ中米旅行の間、八月十六日木曜日でしたがその日はメキシコを出ましてグァテマラへ行くためにメキシコ航空のB七二七の二〇七便に乗るべく、空港へ行きましたがその時の話です。その便は八時十五分出発の予定でしたが遅れて九時三十分となりました。出発を待っている間、空港の待合室にいた時、一人のスペース・ブラザーを見ました。彼は空港の職員なのか、それとも航空会社の人だったのか、私達が飛行機に乗り込む為に利用したあの飛行場の中を走るバスにも同乗していました。最初は彼がスペース・ブラザーなのかどうか、良くわかりませんでした。私達が待合室で待っている間、彼が私の正面に位置する所へ来て私の方を見た時、私は彼がスペース・ブラザーなのではないか?と思いましたが、しかし良くわかりませんでした。それで「あなたはスペース・ブラザーなのですか?」と心の中で問いかけると彼は全然別の方向を見ているのです(何故、そうしたのか、その理由がわかるように思います)。「やっぱり違うのか?」と思っていますと、また、私の方を見るのです。それで、私の後の席に座っている人を見ているのかと思いましたが、そのようでもなく、わからずにいたのです。

しかし、飛行機に乗り込む寸前になって、やはり、彼はスペース・ブラザーだと思い、飛行機のドアを通る直前に、通路の横にいた彼に目礼しながら、先ほどから彼がスペース・ブラザーだと思ったり、また懐疑的になったりしている自分の心がおかしくて私が私自身を笑うと、彼も目でこたえながら、笑いをこらえるようにして少し笑っていました。実に、良いフィーリングというか、ホワイティング氏に似た感じの人でした。そして、私は、心の中で「スペース・ブラザーズありがとう」と感謝しながら飛行機に乗り込みました。飛行機が離陸してからも、旅行中、感じていた事ですが、スペース・ブラザーズがすぐ近くにいるように感じられました。

離陸してから十分ほど経過した時私が座っていたのは、右側の窓際の席だったのですが、斜め前方の方向に裾の広がった山があり、その山の上空を細長い物体が移動して行くのを見ました。恐らしきものは見えず、細長い葉巻のような感じ、しかし、距離が遠くて、他の飛行機なのか宇宙船なのかは、わかりませんでした。三十秒から一分ほどすると雲間に入っていったように見えましたが、消えたのかも知れません。

心では判別出来ないので、内奥の意識によって判断しましたが、宇宙船だったと思いました。

そして、年が明けて一九八〇年となり、一月三十日に二回目の宇宙船目撃があったわけです。その後、二月の何日だったか忘れましたが、横浜に行った時、横浜駅の西口の付近より三分位の間、銀色もしくは白銀色に光る箱型のように見える物体を見ましたが、こちらの方は、未確認です。ヘリコプターではなかったように思えるのですが、確認する間もなく、ビルの陰に入ってしまいました。以上、近年における目撃報告と旅行における体験などを書かせていただきました。

タバコをやめることができた

静岡県　高梨和明

久保田先生、いつもありがとうございます。昨年九月の私共の披露宴に自分勝手な私達のお願いにこころよく御出席下さいましてありがとうございました。伊豆までの遠路をわざわざ私達のためにお越しいただいたばかりでなく、夜には私達にやさしく語りかけていただき、ありがとうございました。お礼をと思いながら大分失礼いたしました。

私は先生をこれまで私の指導者と勝手に決めてきました。その先生とお会いする機会をいただけましたのは一生の想い出になりました。

あの時、先生は「悪魔の煙」をやめなさいとご教示され、絶好の機会とばかり、一日に二十～三十本ぐらい吸っていたタバコをきっぱりとやめることができました。また同様に先生に教えていただいた「全身摩擦入浴法」もずーっと実行して風邪をひかなくなりました。ありがとうございます。先生には頼りっぱなしで申し訳ございません。

アメリカ南米の旅を先生に「ぜひ行きなさい」とすすめていただき、決心しました。妻もその時はピンとこなかったようですが、しばらくしてOKを出してくれました。今では妻・奚幸の方から「旅行はもうすぐね!」と話しかけてきます。本当に先生には感謝します。

その他、先生にじかに接する機会に多くの希望が湧いてきたことを感謝いたします。それではアメリカ南米旅行でお会いできることを楽しみにしています。

またも円盤を目撃

岩手県　熊谷友子

このたびは久保田先生の前に日々山のように置かれるでしょう郵便物の中に、不肖私のもお目にとめていただき、お返事まで頂戴いたしましてまことにありがとう存じました。

先生もアダムスキー氏もGAPすべて宗教には関係なく、科学のグループでありますことをよく承知いたしており、そのためにこそ入会させていただきたかったのでございますので何卒ご休心下さいますように。

冒険不足が先生にご心配をおかけ申し上げてしまったようですので、あ

らためて筆を取らせていただきました。

私はミッションスクールで学んだ為もありましょうか、長年クリスチャンで修道院にいた日もありましたが、目覚めましてからは宗教グループの中にいるのが大きな悩みとなり三年前に勇気を出してカトリック教会より除籍してもらうよう申し出まして許可されました。ところがこのことを知ったクリスチャンから異端者！ 頭がおかしい！ といろいろ言われ、一時は本当に大変でした。カトリック教会は個人的には素晴らしい人たち（ルールドのベルナデットその他。近くはノーベル賞を受けたマザー・テレサ）を出していますが、巨大な組織としては非常に視野が狭く、したがってその心もせまくかつてガリレオの地動説をきびしく弾圧した頃と少しも変わっていないことを身をもって体験しましたので宗教グループではないGAPとご縁ができましたことがまことに嬉しく本当に救われた思いの昨今なのでございます。

それだけにかつて自分のいたグループの方々に早く目覚めていただきたいと思い、今春の賀状も無い知恵をしぼり、スペース・ブラザーズにも呼びかけ、教えて下さいとお願いしました。そしてクリスチャンには「祈り」を主体にした文章が通じやすいことに気づき、そのようにしてみました。

イエスさまは人間の転生をお説きになりましたのに、二千年の間に誤って伝えられ、今のクリスチャンは信じません。教会の中で「人は何度も生まれ変わる」などと言おうものなら、たちまち異端視される現状です。またイエスさまを神として祭り上げていますし、この二点で仏教者より目覚めが遅れるのではないかと思います。実際、他の偉大な諸惑星の話をしても仏教者よりクリスチャンの方がコチコチで骨が折れます。

昨秋仙台で笠原さまにこの話をしましたら「久保田先生もいつかクリスチャンに話してわかってもらえなかった」と残念がっていらっしゃいましたよ、とお伺い致しましたので——よりいっしょうけんめいに賀状の文章を考えましたし、また私のハガキぐらいでコチコチのクリスチャンがどれだけ心を動かして下さるかわかりませんけれども「まあまあ出さないよりは良い」と、先生に多少なりともホッとしていただけましたら——と存じまして、指導的立場の方々へも差し上げましたことを、こまかくご報告させていただいたのでございました。

先便に、近頃は円盤を見なくなったと申し上げましたが、去る一月十三日、十四日と続いて今年初めての目撃を致しました。

十三日夜六時半頃、星より大きいオレンジ色の光体が三つ、ピカッ、ピカッと光を発しながら南より北東へとゆっくり飛んで行きました。母と二人で路上へ出て見ました。十四日の夜はやはり同時刻ですが、とてもおもしろかったです。

台所で仕事をしながら庭に面した南の空をガラス戸越しに時々のぞく習慣になっていましたが、空といってもこの場所からは建てこんでいるため、わずか一間四方の空しか見えません。ところがこの狭い空間に円盤が来てくれたのです。深夜と違って星の光がまだ弱いので、すぐにわかりました。

ちょうど近くの知人が来てましたので、二人で手を振りましたら、応えてくれるかのようにパーッと光が八方にいちだんと強くなり、一分くらいしましたら次第に薄くなってパッと消えてしまいました。

「また出るでしょう」と言いましたら、本当にまもなくまた小さな光が見えはじめ、前と同じに光り方が次第に強く金星くらいになって、そのあともっと強烈になり、まもなくまた薄くなってゆき、パッと消え、これを数回繰り返してくれました。

五、六回目ぐらいだったでしょうか、輝いているあいだに近くの公園へ行ってよく見たいと思い、急ぎ一人で外へとび出しました。円盤は待っていたかのように前より低い位置でさっきと同じに点滅を繰り返してくれました。私は嬉しくなってテレパシーで話しかけて手を振りました。非常に寒い晩で、いつまでも立っていられなくなり帰りはじめました。

建物のかげになり円盤が見えなくなるところまで来て「残念だなア」と思いましたら、察してくれたかのようにパッと消えましたので、びっくりしましたし、あきらめがつきました。

と同時にもう一度前の場所に来てくれそうな気がして、急ぎ家へ戻り台所から一間四方の空間をじっと見てましたらやはり来てくれました。また光りはじめました。嬉しくなって、さっきはアンマさんにマッサージしてもらっていて見られなかった母を大声で呼び、見せることができて、よろこんでもらいました。

私のような者についてまわってくれますのですっかり恐縮してしまい「円盤さん、ありがとう。今夜はもう帰って下さい」と言いましたら、強烈に輝いたあと、次第に光が薄くなり、パッと消えました。またあしたの晩も？と思いましたが、雪になりました。月の美しい夜など、月に住む兄弟たちにテレパシーを送り、手を振ったりしてますので、月から来た円盤かしらとも考えたりしてました。またおもしろいことがありましたら郵便物の山を高くして申しわけございませんが、またお知らせいたします。

テレパシー

福井県　柳沢信一

幼い頃から超常現象を体験している私にとって、はじめて「テレパシー」の本を手にしたとき、胸の動悸を抑えることができなかった。

木に話しかけると返事をして、風もないのに結構大きな幹が揺れ動いたりする。ネコやヘビとも会話を交わしたことがある。そのテレパシーによる声は男性であったり女性であったりする。それは人とテレパシーをするのとなんら変わりはない。アダムスキー氏によれば、万物は原子や分子の循環によって利用され成りたっており、過去に人間の肉体の一部分であった原子なども生物や無生物に利用されるという。

もし透視が可能なら動物たちと交わした過去世の人物の姿を見ることができただろう。残念ながら私は透視能力はあまりなく、テレパシーだけが高まっている状態である。

そしてまた、これは自分でも一時不思議だと思ったが、未来からの会話が可能なのである。まだ話していない一カ月以上先の会話がどうして未来から聞こえてくるのか。そしていったん聞こえてしまった会話は必ずそのとおりになる。これは三次元の世界から考えるから頭が痛くなってくるのだと思い、四次元の世界から考えてみた。四次元は過去、現在、未来という時間をすっぽり包んでしまう永遠であるのなら、三次元の世界からみた未来から現在という現象は、四次元においてそれは現在から現在へのメッセージだということになる。

四次元の永遠というのは、過去、未来を含む現在であるといいきれないだろうか。「現在は永遠なり」。これが体験を通して得た結論である。

迫害を恐れまい

大阪市　由良和豊

高校時代私は鼻ばかりならしていた。あれは五年前の高校二年の冬から卒業までの頃だった。けんかと話し声の絶えない学校に私は在籍していました。私は、授業では蓄膿症と過度の薬の使いすぎにより朝から夕方まで寝てばかりいました。当然、私はクラスのヤリ玉にあげられました。破壊と殺戮の絶えないこの地球上のどこの学校でもたとえ一流校であろうと三流校であろうとどのクラスにも一人ぐらいは迫害されるやつがいるものです。ちょうど私はその代表にされたのです。そしてユダの

ようなクラスの者達によりちょうどイエスを裏切った時のユダのようなマインドで私を見るのでした。その一年半にわたるその学生時代の間私は何を学んだのでしょう。クラスのかっこうの獲物となった私はさまざまな迫害にあいました。最も代表的な迫害にあいましたのは先生が、卒業生が社長になった話をしていた時のことでした。クラスで最も頭が良くそして人気のあったA君が、それは私だというような口調で静かにそして確信に満ちた口調で私の名前を言った。「○△や」。その時どっとクラスじゅうの者が私のことを大声で笑いました。地球という惑星では頭が良く能力があり、そして思いやりが全くなく、どちらかといえば弱い者を迫害し、いじめてばかりいるような者が、学校では非常に人気が出るようです。これはそういう態度が他の者の低い想念に同調するからであろうと思います。このことは以前、久保田先生がバイオリンの絃を例に機関誌でお書きになっていたことがあったので、そのことが頭に浮かびました。地球という惑星では医者でさえポンポンとよく口から他人をバカにしたり軽蔑したりするような言葉がよく出てきます。ここにおいて想念観察がいかに重要なものであるかがわかりました。久保田先生が戦時中軍隊で自由主義者の烙印を押されて迫害を受けたと同じように私も学生時代の一年半こういうような体験を受けて同じような苦しみや体験をしたと思えば、いい思い出として今の私には残っているし、地球人の習性や性格もわかったように思います。そして地球人が50人いれば45人までは確実に低想念を持っているという事も発見しました。これからもGAP会員としての誇りをもって、過去のさまざまな体験を参考にしつつそして宇宙の平和のために弟を実行していこうと思います。GAP会員の皆様に宇宙の法則が燦然と輝きますように。

脱都会をめざそう

東京　田口善茂

円盤同乗記によると、一九四〇年戦争の勃発を予知したアダムスキーは、パロマー山麓のヴァレーセンターへ移住し、ここで彼のグループは自給自足のため、ささやかな農耕計画を企てて勤勉に働いたとあります。21世紀までの近い将来、戦争による食料危機あるいは地震などのカタストローフが、大都市近辺に必ず起きるであろうということがあらゆる方面の人々に予見されています。

現在の社会情勢を見てみますと、増々その感が深くなったようです。

そこで今から私は、都市生活を引き上げ、どこかの土地に移り住んで何人かのグループによる有機農法を中心とした自給自足の生活をめざしたいと考えています。

それと都市生活をしていますと、雑音、雑事が多く、肝心の知覚力の開発が思うように専念出来ないことも一因しています。

GAPの会員の中で、私と同じように宇宙的な生き方を農村において実現しようと考えている方、土地の情報を持っている人御一報下さい。〒一〇一東京都千代田区外神田三―一六―一五　田口善茂

●山口緑氏（山形支部代表）の自宅と周囲の美しい田園風景（上山市）

■文通のお願い

一緒に語り合える近くにお住まいの会員の方、ぜひご連絡下さい。多数のお便りをお待ちしております。次のどちらでも結構です。

〒316茨城県日立市東大沼町一―二九―二〇　鶴志田靖子

〒319―11茨城県那珂郡東海村豊岡三六六　川野恵子

福岡県または北九州在住のGAP会員の方ご連絡下さい。GAP会員のどなたでも文通を希望しますのでよろしくお願いします。

〒800福岡県北九州市門司区ニタ松町四―二二五―三〇五　野崎郁美

電話〇九三―三八一―三五一八

「テレパシー」解説講義の筆記録第1部完成―出版

本年度東京月例会における久保田先生の名講義の完全トランスクリプト。ぜひ1冊をお手許におそなえ下さい。

B5判／活字タイプ印刷／¥300〒200

注文は下記へ直接にどうぞ。

〒989―16 宮城県柴田群柴田町大字本船迫字内沼田96―2　安藤澄雄　振替仙台 30019

＜日本ＧＡＰ創立20周年記念＞

本年度ＧＡＰ総会は11月９日に開催決定

1980年度日本ＧＡＰ総会は下記の要領で実施が決定した。ただし講演者（複数）が未定で現在物色中であり，正式なプログラム成立は９月以降になる。詳細決定次第に全会員へ速報の予定。素晴らしい大会を開催するべく鋭意努力するので御期待を乞う次第。

——1980年度日本ＧＡＰ総会——

日　　時	11月９日（日）午前10：00より16：30まで
会　　場	東條会館１階大ホール 東京都千代田区麹町1—4（皇居真裏の半蔵門のそば）　☎265—5111（大代表）
当日会費	未定
プログラム	詳細未定なるも，久保田主宰者の講演と今夏実施されるＧＡＰ企画第２回「アメリカ南米宇宙考古学の旅」８mmサウンド映画２時間分が含まれる予定。
夕　食　会	会費等詳細未定なるも，総会終了後６：00より同会館内の別室大広間で立食形式による大ディナーパーティーを開催の予定。
＜備　考＞	東條会館は皇居裏の半蔵門（はんぞうもん）お濠端に位置する。結婚式場として名高く，462名収容の大ホールもある。

●山形支部機関誌

①ユニバーサルメッセージ
②日本ＧＡＰ山形支部
③山口緑／山形市東原町4-17-18 朝日荘23号／振替山形6525山口名義
④Ｂ５　⑤手書きファックス印刷
⑥150部　⑦￥100　⑧￥140
⑨No. 6（在庫なし）　⑩10頁

●仙台支部報

①ＧＡＰ仙台支部報
②日本ＧＡＰ仙台支部
③笠原弘可／振替仙台 31057　笠原名義
④Ｂ５　⑤手書きコピー
⑥30部　⑦￥100　⑧140
⑨No. 3　⑩６頁

●静岡支部報

①支部報
②日本ＧＡＰ静岡支部
③野口敏治／静岡市西島304-9
④Ｂ５　⑤手書きコピー
⑥70部　⑦無料　⑧無料
⑨No. 19　⑩10頁以上

●岐阜支部報

①岐阜支部報
②日本ＧＡＰ岐阜支部
③武田充弘他３名／名古屋市中川区中郷5-45
④Ｂ５　⑤手書きオフセット
⑥50部　⑦￥100　⑧￥140
⑨No. 1　⑩13頁

●松山支部報

①支部報
②日本ＧＡＰ松山支部
③伊藤達夫／愛媛県今治市黄金町1-4-4
④Ｂ５　⑤手書きコピー
⑥20部　⑦￥200　⑧￥140
⑨No. 2　⑩14頁

●熊本支部報

①支部報
②日本ＧＡＰ熊本支部
③首藤秀利／熊本市黒髪2-28-9 藤川方
④Ｂ５　⑤手書きコピー
⑥30～40部　⑦￥100　⑧￥140
⑨No. 2　⑩16頁

各地支部報紹介

日本ＧＡＰ地方支部では支部報の発行が活発化してきた。貴重な情報や意見が盛り込まれているので，希望者は直接に発行者宛注文されたい。
①題名　②発行所　③編集発行人　④版型　⑤印刷方式　⑥発行部数　⑦頒価　⑧送料　⑨最近号の号数　⑩総頁

＜主宰者よりお願い＞

各支部報にＧＡＰニューズレターの記事や写真等を転載する場合は，必ず事前に主宰者（久保田）宛に一報し，許可を得た記事のみを掲載されたい。本誌の古い記事の中には必ずしも現状と合致しないのもあるのでかくはお願いする次第。転載した場合は「ＧＡＰニューズレター第×号より。転載許可済」と必ず明記して下さい。

日本GAP企画第2回「アメリカ南米宇宙考古学の旅」

またも64名の大部隊！ ——稀有の大旅行団が出発——

●かねてから企画中の本年度海外旅行は7月末をもって申込を〆切ったが，またも昨年同様60名を上まわる大人数となり，日本人の南米行きツアーとしては稀有の大旅行団となった。申込者各位の熱意に衷心より感謝する次第である。なかには主宰者久保田と数度にわたり海外旅行を共にされた野口敏治氏（静岡市）その他の方々があり，深謝にたえない。

●一行は予定どおり8月14日（木）正午12：00に，成田空港北ウィングの日本航空団体カウンター⑪前に集合し，結団式を挙行後，日航64便で2：50分に勇躍出発，アメリカと南米，ペルー，ボリビアをめぐる長途の旅に出る。14日にロサンジェルス着後，カリフォルニア州ビスタのGAP本部訪問，パロマー山頂のパロマー天文台，アダムスキーの旧居跡パロマーガーデンズ等を見学後，同夜は昨夏同様ビスタ市のレストランで日米GAP合同の大夕食会を開催。翌15日はモハービ大砂漠の一角をなすデザートセンターへ行き，1952年11月20日アダムスキーと金星人オーソンが劇的な会見を行ったコンタクト地点を視察。16日にペルーのリマ市へ飛び，ここを皮切りにクスコ，マチュピチュ，プノ等のインカ帝国とプレインカの名高い遺跡群を見学し，チチカカ湖を水中翼船で遊覧後，ボリビアへ入り，ラパス市内やティワナコの大遺跡に堪能し，アンデスの古代文明をバックに生きるインディオのかもし出す異国情緒を満喫したあと，またペルーのリマへ帰り本旅行の圧巻たるナスカの神秘の大地上絵をセスナ機で上空から視察して驚異の眼をみはり，24日にロサンジェルスへ帰着して，近郊の美しい保養地サンタモニカ海岸で海水浴に打ち興じたあと，25日に日航63便でロサンジェルスを出発，ホノルル経由で26日午後17：10に成田空港へ着き，2週間の大旅行を終了する。主宰者久保田と田中（ワールドセブントラベル社）の名コンビによる手作りの旅行企画は毎回大好評を博しているが，今年も素晴らしい日々をすごして，生涯忘れ得ぬ思い出を参加者の胸中に残すことになろう！

＜参加者名簿＞（申込順。敬称略）

	氏名	現住地	職業	備考		氏名	現住地	職業	備考
1	野口敏治	静岡市	自営		34	塩津憲雄	京都市	会社員	
2	菅原恵子	千葉県	会社員		35	藤井洋	東京	〃	
3	柴田文子	山形県	〃		36	若林昭夫	埼玉県	〃	
4	福田昌利	名古屋市	〃		37	斉藤康美	大阪府	〃	
5	榊原敏弘	京都府	国鉄職員		38	園村信昭	熊本県	Gデザイナー	
6	小林智利	群馬県	会社員		39	津野田俊行	熊本市	僧侶	
7	清水正	山形県	国鉄職員		40	照井美枝子	札幌市	助産婦	
8	安藤澄雄	宮城県	会社員		41	袈裟岩敬一	千葉県	自営	
9	大橋博子	北海道	公社員		42	川上英明	東京	会社員	
10	野原次男	千葉県	教員		43	渡辺克明	栃木県	学生	
11	三津田稔	〃	公社員		44	武山保	名古屋市	国家公務員	
12	鈴木一宏	〃	地方公務員		45	関谷正明	滋賀県	会社員	
13	赤間昭夫	宮城県	会社員		46	堀川玲子	新潟県	〃	
14	高梨和明	静岡県	鍼灸師		47	北口良次	兵庫県	〃	
15	〃美幸	〃	看護婦		48	千田光明	神奈川県	財団職員	
16	大山耕一	三重県	なし		49	松崎俊一	札幌市	学生	
17	小坂恵	岡山市	国家公務員		50	吉岡裕人	福岡市	会社役員	
18	斉藤泰文	東京	〃		51	成瀬喜一	大阪府	自営	
19	近藤富子	埼玉県	POPライター		52	橋口真一	静岡県	会社員	
20	武田充弘	名古屋市	学生		53	高橋徹	福岡県	学生	
21	首藤秀利	熊本市	〃		54	志田真人	千葉県	会社員	副団長
22	山城尚雄	前橋市	国家公務員		55	〃恵美子	〃	なし	
23	山口緑	山形市	塾講師		56	〃宇貴	〃	〃	
24	間嶋泰行	岐阜市	治療師		57	野島哲浩	高知市	教員	
25	山崎正道	栃木県	会社員		58	〃隆子	〃	〃	
26	荒引光子	滋賀県	看護婦		59	池田道孝	東京	会社員	
27	大内清子	愛知県	〃		60	夜船博実	福岡市	学生	
28	岡田英輔	新潟市	会社員		61	仲地嘉武	大阪府	会社員	
29	北條憲一	東京	学生		62	品野友一	埼玉県	〃	
30	熊倉昌彦	群馬県	〃		63	久保田八郎	東京	日本GAP	団長
31	松本隆司	東京	会社員		64	田中正	神奈川県	ワールドセブントラベル	添乗員
32	磯目三鶴	〃	〃		65				
33	菊地喜之	千葉県	自衛官		66				

日本GAP各地行事報告と予告

80年3月以降分

▼松山支部大会

●三月二十三日・松山市民会館
●午後一時より午後六時半まで
●出席者二十五名

三月二十二日午後五時半久保田先生は助手の浜村さんとともに無事松山空港に着かれました。早速車で市内の全日空ホテルに入り旅の疲れをいやされた後、その夜は会員有志による日本料亭での歓迎夕食会に出席されて遅くまで歓談され、会員相互の親交を深めました。

明くる二十三日は午後一時より市民会館での「松山支部大会」が開かれましたが、会場には静岡支部代表の野口さんをはじめ、遠く山形や群馬、大分などからかけつけた熱心な会員の高貴な波動が充満したすばらしい雰囲気の大会となりました。代表挨拶のあと久保田先生が「アダムスキー問題の真相」と題する講演を行い熱弁をふるわれました。その中で先生は「自分が宇宙の中心である」という自覚を持って生きることが大切であると強調されました。また「太陽が無条件に光を万物に与えるように、人間を差別なく万人に愛と親切を与えるならば、その人の運命に奇跡が生じる」と力説されました。講演のあと質疑応答が行われ、活発な質問が相次いで出されました。

ついで待望の映画「アメリカ中米宇宙考古学の旅」が浜村さんによって上映され、久保田先生が解説をされました。ピスタのGAP本部、日米合同夕食会、デザートセンター、インディアンの井戸の跡など、次々に感動的な場面が登場して出席者一同大変感銘を受けました。

映写終了後、六時半より同じ場所で有志による夕食会が開かれましたが、ここでも率直な質問が数多く出され、先生はていねいに答えておられました。

二十四日は会員有志で先生と浜村さんを松山市内観光にご案内しました。松山港からフェリーに乗って春間近い瀬戸の海をのんびりと巡航したあと松山城や道後温泉、石手寺などをまわって楽しいひと時を過ごしました。特に松山港からフェリーに乗った時には、久保田先生は各地方支部　会へ行かれても船に乗られるのは初めてとのことで大層興味深いご様子でした。

今回の松山大会が開催出来たのも、ひとえに久保田先生をはじめとして、静岡支部代表の野口さん、助手の浜村さん、それに遠路はるばる海を越えてはせ参じて下さった全国の熱心な会員の皆様の友情あふれるご協力のたまものです。それと同時に地元松山の会員の皆さんが、藤原美由紀さんを中心にがっちりと団結して献身的な協力をして下さったおかげです。ここにそのご厚情に対して心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。最後に久保田先生並びに全国のGAP会員の皆様のご多幸をお祈りいたします。

（伊藤達夫記）

▼第三回新潟支部大会

●四月五日　厚生年金会館にて
●出席者二十名

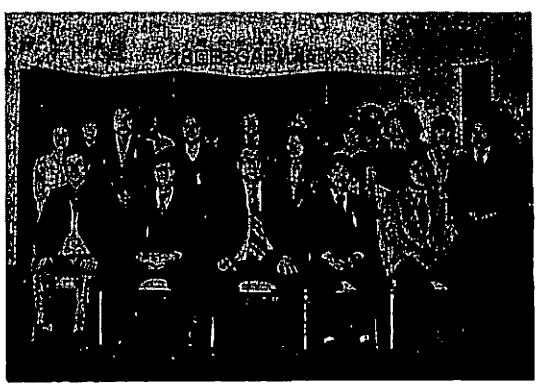
二年ぶり三回目の支部大会ということで、運営面では過去二回の経験が生かされて比較的順調に運んだ。

大会前夜の四日には、仙台・山形・群馬・秋田等から遠路をお越し下さった会員と支部会員で盛大な久保田先生歓迎夕食会が催され、初対面の方とも和気あいあいの雰囲気で、実に愉快であった。

翌五日、大会当日は、東京から夜行でいらした鈴木さん、近藤さん等を加えて少人数ながら真剣な空気の中で先生の講演が午前中に行われた。講演は一般社会情勢から宇宙問題・哲学的内容等、実に中味の濃いすばらしいもので、一時間半があっという間に過ぎてしまった感があった。

午後からは昨年の旅行の8ミリ映写と質疑応答が行われた。映写に関しては、機材の運搬等で浜村氏に多大のお世話になった。質疑応答はやや時間不足で、いまひとつ突込んだ内容の話が交わされなかったのが心残りだった。やはり大会後に夕食会を行ってリラックスした雰囲気の中で質疑応答の延長をたっぷり時間をとって行うという前回のスタイルの方がよかったようだ。

大会終了後、上野への最終特急で先生をお見送りするとき、『こんなに慌しくお送りしないで、もう一泊していただく



べきだったな……」と感じた。その後この列車が原因で先生が発病されたと聞いて、本当に後悔した。

様々な問題はありましたが、久保田先生、浜村氏はじめ、ご協力下さった方々本当にありがとうございました。

（足立亘宏記）

▼静岡支部大会

●五月四日　静岡市民文化会館
●午後一時より五時半まで
●出席者五十一名

つつじの花咲く駿府城堀端の一角にある市民文化会館で静岡支部大会が開催されました。北は栃木、群馬、南は愛媛、福岡と全国から熱心な方々が駆け付けてくれました。

今回は久保田先生は急病のため出席できませんでした。そこで先生は自宅のベッドに仰向けに寝た状態で二時間分の録音をして下さり当日はこのテープを会場で流しました。先生の全力をあげての録音状態が目に見えるようで、より心に強烈に訴えるものがありました。先生の貴重な体験談やステックリング氏からの素晴らしい回答の数々にみなさんシーンと静まりかえり一言も聞き逃すまいと真剣そのものでした。先生の本大会への絶大なるご配慮に心より感謝申し上げます。

アメリカ中米宇宙考古学の旅の映画も浜村さん、遠藤さんたちのご協力によりなごやかに楽しく上映されました。そしてみなさんでテレパシー練習を行いました。今回も熱心な方々が多数参加して下さり、本当に密度の濃い素晴らしい大会となりました。

大会終了後はホテル8階の大広間で静岡の夜景を眺めながら立食パーティーが開催され、こちらの方も実に愉快にみなさん親睦を深め会いました。

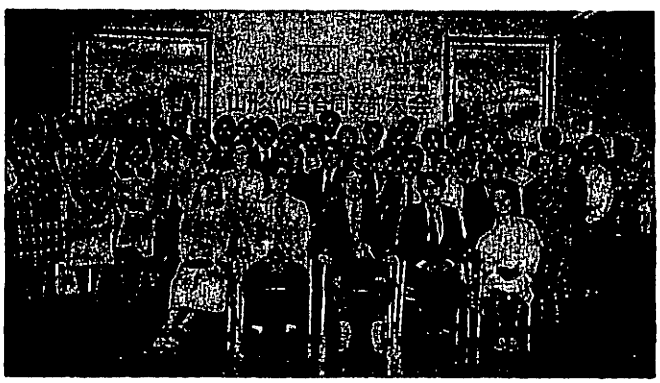
大会が無事立派に終了しましたのも、久保田先生を始め遠路はるばる参加された皆様方の温かいご支援、ご協力のお陰であります。心よりお礼申し上げます。

（野口敏治記）

▼山形・仙台合同支部大会

●五月二十五日　十時より五時半まで
●山形市民会館
●参加者四十七名

山形の豊かな大自然の吐き出す清澄な大気に満たされた朝、会場には受付時刻以前から大勢詰めかけた。今回は年に一度の山形仙台合同の盛大な大会とあって参加者も札幌、函館、青森、東京、静岡、愛知など全国津々浦々より熱心な方々が多数会場を埋め尽くし、開会以前から溢れんばかりの高次な宇宙的フィーリングで満たされた。会場の一角には久保田先生の撮影された素晴らしい写真十点も展示され、色どりを添えた。



午前十時、清水氏の巧みな司会に導かれて、私と笠原氏の挨拶に続き、久保田先生による「アダムスキー問題の真相」と題する一時間半に渡る興味深い大講演を拝聴した。米ソ両国のUFO問題歪曲工作と月面基地建設の事実。自衛力の必要性。恐怖心の徹底的排除と強烈な信念等深遠な驚嘆すべき内容に圧倒された。

午後からは浜村氏による昨年のアメリカ中米宇宙考古学の旅の迫力ある映画上映。今回をもって最後ということで一同熱心に見入っておられた。その後活発な質疑を交わし、五時半無事終了した。

大会後の夕食会も四十名近い参加者を得て、非常に有意義な一夜を過ごすことができた。翌日は山形市近効にある「大沼」へ向けて車を走らせ、大自然の静寂と無限なる創造主の〝愛〟に包まれて素晴らしいひとときを過ごした。

今大会は幾多の不備はあるにしても大成功だった。これもひとえに献身的な活躍をされた役員各氏、遠方より万難を排してお越し下さった方々の熱意と調和と信念の結実であり心から感謝したい。さらに病後まもない体ながらも全力を尽くされた久保田先生、生涯忘れえぬ素晴らしい映画を再現された浜村氏に深甚なる感謝の意を表したい。

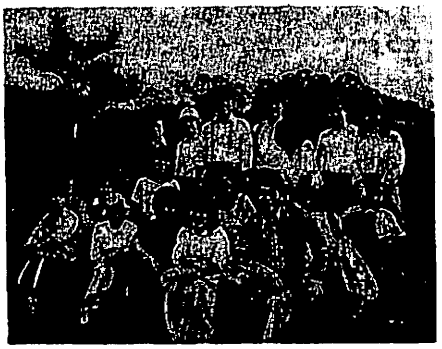
（山口緑記）

▼大阪支部　山辺の道ハイキング

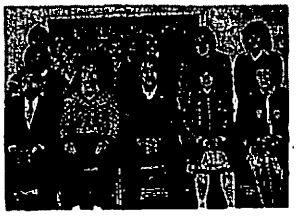
●五月三日
●参加者十七名

大阪支部は戸外で大自然を満喫しようということで、ハイキングを計画し、奈良県天理市から楼井市に沿った飛鳥路、「山辺の道」への散策を楽しみました。ここは多くの神社や古墳の点在するなだらかな丘陵地帯で緑豊かなハイキングコースです。この日は天候に恵まれ、空や太陽は私たちを祝福しているかのようでした。

（仲間秀樹記）



●崇神天皇陵前にてハイキングの一行



●毎月第1日曜日に尼崎市で平塚和義氏（大阪支部代表）が主宰している「生命の科学」研究会。

▼おめでた二件

●昨年十一月四日、広島県安芸郡江田島町の会員・松脇良子さんは、めでたく結婚されて原垣内良子と改姓された。新郎は早大法学部卒、司法試験合格済という秀才。ご多幸をお祈りする。

●浜松市の会員・小島国弘氏も今年二月十日に浜名郡可美村の内田幸子さんと華燭の典を挙行された。編者はご招待にあずかったが、多忙のために遠慮して祝詞をお送りし、これを披露宴で野口敏治氏が代読されたとの由。衷心より祝福申し上げたい。

▼GAP河口湖バスツアー

かねてから東京本部で企画していた河口湖（山梨県）行きの一泊二日のバスツアーを去る五月十七、十八日の両日に実施した。たまには大都会のコンクリートジャングルから脱出して自然界の清浄な空気を存分に吸おうというわけで、東京月例会出席者のみを対象にし、地方会員には通知しなかったが、なかには静岡県や岐阜市などからの参加者もあった。

全員四十一名。内、女性は九名。幸い前日までの寒冷な雨もあがり、十七日午後一時、編者（久保田）宅前から出発するバスにまず数名が乗り込み、途中、東京駅丸の内側南口と新宿駅西口とで全員が乗車し、一路中央高速道を疾走して河口湖を目指したが、この頃から薄日もさして絶好の行楽日和となった。

このツアーには特徴が二つある。まず男女全員が〝よそ行き〟の服装で参加する。男性は背広上衣にネクタイを着用し革靴をはき、女性はワンピースその他のアンサンブルで美しく装い、ハイヒールをはくというスタイルにし、ジーパンやスポーツウェアーは厳禁して、きわめて優雅な雰囲気をかもし出す。次に、バスの車内では編者持参のカセットテープによりクラシック音楽を流して上品なムードを盛り上げようというものである。最新式のバスだからステレオのオーディオ装置一式が備えてあるのだ。

これは大成功だった。他に例のないユニークな旅行が実現して、編者多年の念願が叶い、しかも病後の事とて、ひとしお嬉しくなってくる。

BGM（背景音楽）としては編者の愛好するブルックナーやマーラーの深遠な大曲は避けてポピュラーなものを選び、ヨハン・シュトラウスの軽快なワルツ曲を皮切りに、ベートーベンの交響曲六番「田園」を流す。何度聴いたか知れぬ食傷気味のこの名曲も、窓外の新緑の山々を眺めながら耳にすると、比類なく美しく、ひどく感傷的に響いてくる。最終楽章などはまさに「泣けとごとくに」だ。万物に宿る創造主の生命の讃歌か。演奏はワルターとコロンビアだから文句なし。

続いてヴィヴァルディーの「四季」に移る。イ・ムジチ合奏団による名演も静岡県の美しい風景にマッチして素晴らしい。富士山の裾野一帯はカリフォルニア州南部のパロマー山麓に似ているけれども、日本の方がはるかに緑が豊かである。音楽鑑賞のためのバス旅行ではないので各自気ままに談笑して下さいと伝えてあるから、車内は談論風発、特に成田智恵子さんの楽しそうな笑声がよく響く。最後にモーツァルトの「フルートとハープのための協奏曲」を流したが、終わらぬうちにバスは予定より早く湖畔に到着し、一同は宿舎の「湖のホテル」へ入った。

しかし全員がクラシック音楽の愛好者でもあるまいから、これは編者だけの自己陶酔に終わるのではないかと懸念していたが、そうでもないことが後日判明した。

暫時各自の部屋で休憩して六時半から大広間で全員の宴会が始まった。最初に編者が挨拶し、続いて野口敏治氏（静岡支部代表）が業者に作らせた木製のコイン入れをツアーの参加記念として全員に進呈された。氏のご厚意には全く感謝のほかない。酒がまわるにつれて宴たけなわとなり、次々と歌が出る。騒ぐときは大いにハメをはずして、まじめな会合とのケジメをつければよい。若い小方君が太平洋の歌をうたったのにはおどろいた。この歌は昭和十一、二年頃に流行した軍歌みたいなもので、編者は実に四十数年ぶりに聴いたことになる。

今春の発病を機会にビール以外のアルコール類は一切飲むまいと誓っていたが

勧められると断り切れない性分のために少量ながらも日本酒を飲まざるを得なかった。新潟支部大会以来、約四十日ぶりに味わったが、結構うまい。高橋和美さんの高座での落語は面白く、彼女は意外に芸達者な面を見せた。

八時半からはホテル内のバーを借り切ってダンスパーティーを開催した。病みあがりの編者はあまりドタバタできぬ身だが、トップを切って雰囲気を盛り上げようと思い、西山博美さんと社交ダンスを演じた。その後はゴーゴーダンスとなり、十数名の男女が入り替わり立ち替わり激しく踊りまくる。他人の面前でも全く意に介することなく踊る人と、決して踊らないで眺めている人とに別れるが、どちらでもいいだろう。ここでは飲み放題なので、踊らない人も喜んでいるし(そのように見えたが、どうかな)、他人が踊るのを見ていても結構楽しい。編者は十一時前頃に自室へ引き上げて就床したが、翌日聞くと一部の人達は三時頃まで語り合っていたという。このツアーはもともと遊びを目的としたものだから、これも結構なことだ。

夜半、雨が激しく降ったようで、翌朝は窓から見えるはずの富士山が雲に覆われて、さっぱりだ。本日の五合目登山はだめかと一瞬絶望感におそわれたけれども、いや、午後は必ず晴れる、それまでにコースを変更すればよいのだと思いながら朝食をすませて九時に全員バスで出発する。

今日の車内のBGMは趣向を変えてロシアやギリシア民謡の合唱とかメキシコのマリアッチなどを流したが、曇り空のためにどうもパッとしない。富士スバルラインへ行くと意外にも昨夜の降雪で通行止めとなっており、五合目へ行けないことになった。そこでコースを変更してまず白糸の滝を見学する。これは富士宮市の北部にある滝で、名称から連想して小さなチョロ滝かと思っていたら、どうして、高さ約二十六メートル、幅約百三十メートルの大瀑布だ。ミニ・ナイアガラという図だろう。

次に風穴(ふうけつ)というトンネル状の洞窟へ入る。約二百メートル奥まで行けるが、それ以上は金網が張ってあり、進めない。途中には氷柱群があり、まるで冷蔵庫だ。足元がヌルヌルして滑りやすく、メキシコはパレンケの碑銘の神殿ピラミッド内部のトンネルの石段を思い出す。

ここを出てから西湖パラマウントで一同昼食をとったが、この郷土料理は美味だった。

午後からは青空が見え始めて、富士の秀峰が雲上に出現した。ツイている！よし、スバルラインへ行こう。バスは勇躍疾走し、運よく通行止めも解除になって、一合目から登って行く。多数の車とともにやがて五合目の大駐車場に到着。ただちに現地解散して数名の仲間と一緒に神社へ参詣する。

標高二千三百メートルのこの高地には残雪があり、気温も低いので、用意したレインコートをはおり、マスクをつけて散策しながら撮影する。下界は雲でかすんで見えないが、上を見ると雄大な山頂から白銀の縞模様の筋が斜面に垂れ下がり、圧倒的な景観だ。五合目までは車で行けるが、ここから上は徒歩で登るのである。夏は大変な人出らしい。一度この山頂をきわめたいものだが、よほどの体力をつけぬと無理だろう。しかし今回のツアーで五合目まで行けたのは幸いだった。

帰途は快適なドライブだった。参加予定だった鈴木一宏君(千葉県)が都合で来られなくなり、お詫びのシルシにといってビール一ダース券と一千円を田中氏を通じて寄贈されたので、再度河口湖町へ引き返し、酒店で飲物やおつまみ等を仕入れ、旅行社もこれに援助されたようで、皆さんに配り、陽気に歌なども出てひと騒ぎしながら帰京し、愉快な二日間の旅を無事に終えることができた。皆さん方に感謝する次第。

(久保田記)

▲霊峰富士をバックに愉快なツアーの一行

◀西湖畔を散策する

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　時	会　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2：00→6：00 ※9月からは毎月第1土曜日に変更 ※11月のみは総会のため月例会を中止	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03—828—2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り，奥のエレベーターから4階へ行く。	¥300	テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」を持参。2：00→3：00「テレパシー」講義，3：00→4：30主宰者挨拶・報告，テレパシー練習，休憩。4：30→6：00自己紹介，研究発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎06—436—3478 子安達雄　☎06—719—7228	300	テキストとして「テレパシー」（文久書林刊）」「生命の科学」を持参。東京例会における久保田主宰者の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00 ※8月は31日，11月は30日，12月は21日に変更	新潟駅前「青年の家」☎0252—44—6766 ※8月のみ厚生年金会館 ☎0252—43—3551 連絡先＝足立亘宏　☎0252—62—0968	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の「テレパシー」講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。 ☎(55)5235 ※8月のみ3日に二本木の常通寺に集合阿蘇にて開催。 連絡先＝首藤秀利 〒860 熊本市黒髪2—28—9　藤川方 ☎0963—43—1525（午後9時まで）	200	テキストとして「生命の科学」と「テレパシー」（文久書林刊）」を持参。久保田主宰者の東京例会における「テレパシー」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
岐阜支部	毎月第2日曜日 午後1：30→4：30 ※10月のみ第4日曜日に変更。11月は総会のため中止	岐阜市神田町「商工会議所」☎64—2131 国鉄または名鉄「岐阜駅」下車，徒歩10分，バスか市電で「柳ケ瀬」下車，近鉄百貨店を北へすぐ近く。 連絡先＝間嶋泰行　☎0582—71—0069 林　国宜　☎0586—45—6468	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田主宰者の講演録音テープ公開。研究発表，座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222—95—0725	200	東京本部月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00	山形市民会館。小会議室。山形市香澄町山形駅より徒歩5分。☎0236—42—3121 連絡先＝山口　緑　山形市東原町4—17—18朝日荘23号　☎0236—44—0676（勤務先・12：00より夜9：00まで）	200	テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30 ※10月は19日（日）午前9：00→12：00 12月は14日（日）午後	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011—241—9171　連絡先＝伊藤重信 ☎011—251—4331	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00	7月より静岡市，婦人会館 連絡先＝野口敏治　☎0542—86—7729 ※9月のみ浜名湖館山寺荘で出張月例会を開催の予定は事情により延期。	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第3土曜日 午後6：00→9：00	旭川市四条通り10丁目右1号「北海道新聞旭川支社」会議室。電話0166—23—2111 連絡先＝石川公一　☎0166—51—5699	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田主宰者の講演録音テープを公開。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：30	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎0898—22—3060 （電話は夜間のみ8：00以降）	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。

★本誌バックナンバー(旧号)★

米GAP本部公認の唯一の日本支部たる日本GAPがアダムスキー問題に関して正確詳細なインフォメーションを伝える本誌は貴重な資料として後世に残るものです。

No.67 主要記事「UFO問題の真相(2)」G.アダムスキー／「永遠の生命を得るには」松尾和也／「私はこうしてGAPにたどりついた」衣笠陽子／「円盤の推進力」清家新一／「動物たちは知っていた」ゴードン・ギャスキル／「科学と人間愛と信念」久保田八郎／その他。

No.68 主要記事「UFO問題の真相(最終回)」G.アダムスキー／〈アメリカ中米宇宙考古学の旅〉紀行「転生と追憶の砂漠へ」久保田八郎／「回想のアメリカ中米旅行」——思い出を語る人々／「質疑応答(1)」スティーブ・ホワイティング／その他。

No.69 主要記事「アダムスキー問題と宇宙開発」キース・フリットクロフト／「ヨーロッパのUFO事情、ベルギーGAPの活動とアダムスキーの思い出」メイ・フリットクロフト／「総会を終えて」久保田八郎／「オーラと過去世の透視」／「質疑応答」(2)スティーブ・ホワイティング(3)／その他

各¥500 〒200

—日本GAP—
振替・東京4—35912
(久保田八郎個人名義)

①「テレパシー」解説講義と(1時間半)
②「質疑応答」の録音テープ(1時間半)

今年度東京月例会における久保田先生の毎月の「テレパシー」各課の解説講義録音テープ。①は真意を理解し、思想の統一を図る上で貴重な資料となるものです。先生の雄大な弁舌は聴く人の心をふるい立たせます。「近況報告」(30分)付き。テープ②は月例会での質疑応答の録音で、先生の明快な回答や珍しい話を聞くことができます。

テープ① ¥1000 〒140
テープ② ¥1000 〒140

2本注文の場合、送料は200円です。

※これらのテープに限り、×月分と記して必ず下記へご注文下さい。(本年1月より毎月1課ずつ録音)

〒274 千葉県船橋市前原西8—5—18
〈東京月例会司会者〉浜村建郎 Tel.0474-65-1844

①

②

①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ペッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500 〒100 ②¥200 〒50 一括注文の場合 〒100

編集後記

★長くお待たせしましたが、ここにやっと才70号を刊行できました。会員諸兄姉のご声援に厚くお礼を申し上げます。

★編者は予定どおり去る六月十五日に成田を出発し、ビスタに二十四日間滞在して七月九日に無事研修旅行を終えて大成功裡に帰国しました。ご援助下さった方々に重ねて心から感謝いたします。筆舌に尽くしがたいほどの素晴らしい旅行でしたが、大要は本号記事でお伝えしましたものの、来たる八月九日の東京月例会で四百点余の豪華カラースライドを公開しますから、首都圏の方は万障お繰り合わせの上ご出席下さい。

★米GAP本部研修の旅、本号の編集刊行と息を入れる暇もなく、八月十四日には総勢六十四名の大部隊で「アメリカ南米宇宙考古学の旅」に出発いたします。昨年度の企画才一回「アメリカ中米宇宙考古学の旅」に優るとも劣らぬ素晴らしい日々を実現させようと関係者一同張り切って準備中です。この旅行記は次号に掲載し、更に十一月九日の東京総会で8㎜カラーサウンド記録映画を上映の予定です。ご期待下さい。

★その総会も今年は創立二十周年記念として盛大に挙行すべく種々画策中です。今年は海外からの要人招待をやめて日本GAP独自な企画で開催しようというもので、詳細は十月中旬発行の本誌才71号でお伝えします。

★先の号外で伝達しましたとおり、アダムスキーの著書すべて、ビスタのGAP本部より発表される公式文書(コズミック・プレティインその他)の日本語版翻訳出版権は、アメリカGAP本部より正式に日本GAP主宰者久保田八郎のみに与えられており、他の人が無断で翻訳・出版することはできません。手書きコピーを販売しても違法行為となりますからご注意下さい。またこのような違法をなす者の翻訳はカルマを持たぬ者の血のかよわぬ訳文にすぎませんから有害無益です。特にこの点にご留意下さるようお願いします。

★先の研修旅行で痛感したのは、アメリカGAP本部の方々の限りない親切な行為こそ、まさに宇宙の法則の実践そのものであるという点です。世には難解な語を並べたてた壮大な論文を書く道学者が多くいますが、実際に他人に対して親切な行為をなさぬ限り、それらがいかに空しい妄言であることか——。ここにおいて宇宙の法則の中心をなすものは〝親切〟であり、これを愛と呼ぶわけです。この重要性はいかに強調してもしすぎることはないほどで、つまるところ、あらゆる哲学が追求する法則は、この〝親切さによる相互の楽しい人生の確立〟という単純明快な原理に返るのではないでしょうか。これはUFOの科学的研究とは別問題だと言う人があるでしょうが、いかに高度な科学的研究にせよ人間の精神のあり方と無関係な研究はあり得ないことで、その両面を研さんするのがGAPです。互いに激励し合いながら前進しようではありませんか。

★UFO問題に対する好奇心燃焼の時代はすぎました。いかがわしい情報が乱れ飛んでいますが、私たちはアダムスキー問題という正道を踏みはずすことなく、足を大地に着けて宇宙を探求したいものです。

★住所変更の届けは必ず①会員番号②旧住所③新住所の三項目をハガキに並記してご一報下さい。新住所のみではお手上げです。会員番号不明の方は②と③だけでも結構です。

★ご送金は当方の事情により現金書留にならないで必ず郵便振替でお願いします。編者宅に限り振替のほうが確実に届くのです。

★東京月例研究会は従来の毎月才二土曜日を今年九月から才一土曜日に変更しますので、お間違いなきようお願いします。

★編者宅への直接のご来訪は恐縮ながらご遠慮下さい。

(K)

GAPニューズレター 70号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365—818
電話(651)0958
振替東京4—35912(久保田八郎名義)
Aug 5 1980
頒価500円・送料200円